

同級生 西住まほ

ノツシーゾ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西住まほの同級生から見た第63回戦車道全国高校生大会。

あるいは、戦車道を全く知らなかった素人が西住まほの熱狂的ファンになるまで。

あるいは、ティーガーIの砲手と西住まほが仲直りするまで。

※pixivにも投稿しています。

目次

S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e
砲手5	クラスメイト5	ライバル2	砲手4	ライバル1	クラスメイト4	砲手3	クラスメイト3	砲手2	クラスメイト2	砲手1
131	122	119	108	104	95	70	50	38	27	15
										1

S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e	S i d e
クラスメイト9	砲手9	クラスメイト8	砲手8	砲手7	ライバル4	クラスメイト7	砲手6	クラスメイト6	ライバル3	
233	224	207	192	179	172	164	156	147	144	

S i d e クラスメイト1

西住まほという同級生は戦車道のすごい選手らしい。

国から強化選手に選ばれているほどで、テレビに映るのも珍しくないそうだ。

勉強だってできる。テストの順位発表のときに五位以下だったのを見たことがない。

顔も同じ女子とは思えないほど凛々しい顔をしているし、性格だってカッコよくて、クラスメイトが困っていると嫌な顔ひとつせず手を差しのべる。

だから西住まほという人は完璧な人なのだろう。

私は以前、まほのことをそう思っていた。

そんな二年のとき、黒森峰の戦車道チームが負けてしまったと聞いた。

実際に負けたのは一週間も前のことだったのだけど、とにかく私はその日の朝、友達から聞いた。

彼女はその試合が十連覇のかかった大事な試合だったこと、試合中にチームの選手が事故で死にそうになったことなどを教えてくれた。

それを聞いても、私は単に

(ああ、大変そうだな)

と、同情しただけで、まほを心配することはなかった。

西住まほなら、そんな問題ではビクともしないだろうと思っていた。話をしてくれた友達だって同じようなものだっただろう。

その証拠に彼女の口調からは、マンガの読者が

『主人公は逆境から立ち上がる』

と確信していて、むしろ

『さあ、どうやって逆転してくれるんだ』

と期待しているのにも似た感情を読み取ることができたから。

そういう考えが揺らいだのは放課後。

宿題を忘れてしまったことに気づいて学校に戻ったときのことだ。

家でしばらくダラダラしていたので、完全に日が暮れていた。

もう先生だって帰ってしまっただろうという時間だった。

だけど、わずかな希望にすがって学校まで歩いた。

意外なことに校門は閉まっていなかった。

どこの灯りもついていなかったから不思議には思っただけで、どうしてだろうと考えはしなかった。

運がいいと思っただけで自分の教室に急いだ。

教室に着くと、電気をつけた。

そして明るくなった瞬間、私は

「わっ！」

と尻餅をついてしまった。

誰もいないはずの教室に人がいたからだ。

咄嗟に、お化けか泥棒だと思った。

逃げようと思った。

けど腰が抜けてしまつて立てない。

死ぬ。

本気でそう思った。

そんなとき聞き覚えのある声が

「すまない……驚かせてしまったようだ」

と申し訳なさそうに言ったので、すこし冷静になれた。

恐る恐る声の方に視線を向けると、そこには学校一の有名人がいた。

「西住、さん？」

呼びかけると、まほは申し訳なさそうに言った。

「すまない……誰かが入ってくるとは思ってなかったんだ」

不審に思いつつ、私は言った。

「えつと……私は宿題を取りに来ただけで、どうして西住さんは教室にいるの？」

「考えごとをしていたんだ」

「考えごと？」

聞き返すと、まほは言い淀んだ。

いつも受け答えがハキハキしていて、テレビカメラの前でさえ堂々としている彼女には珍しいことだ。

それでやつと私にも事情が呑み込めた。

「もしかして、戦車道の大会のこと？」

そう言うと、まほは目をそらした。

あとは黙ってしまったが、答えを言っているようなものだ。

どうしよう、と私は考えた。

選択肢は二つ。

まほの話聞いてみるか、聞かずに帰るか。

私は迷わず後者を選んだ。

これが親しい友人同士だったら逃げるわけにもいかなかっただろうけど、このときは

仲がいいわけでもなかった。

適当に誤魔化して帰るのは簡単だったし、それが面倒がない選択肢に思えた。

「じゃ、じゃあ、私は帰るね！」

そう言つて、私は逃げた。

宿題を持つていくのも忘れるほど慌てて逃げて、次の日、先生に怒られた。

しばらく何事もなく過ぎた。

私は適度に勉強して、適度に友達と遊んだし、まほは『西住まほ』だった。

戦車道のチームは大会で負けてからOG会などへの対応で練習ができていなかった
そうだが、無事に練習を再開できたとも聞いた。

チームに入っている友達に聞くと、まほも練習に励んでいて、相変わらずカッコいい
とのことだった。

それを聞くと安心できた。

あの夜はちよつと疲れていただけなのだ。

そう思えたから。

でも数日して、また友達から

「そう言えば西住さんの妹さん、転校しちゃうんだって」

という話を聞いた。

さらに聞いていると、妹さんはフラッグ車の車長という大事な役割を任されていたそう
うだ。

なのに、それを放りだして仲間の救助を優先したから負けた、ということとで責任を取
らされたのだという。

(西住さんは、どう思ってるんだろう?)

気になった。

でも本人に聞いてみる勇氣はなかったもので、そのまま家に帰った。

「ああ、宿題やらなくちゃ……あれ?」

夜、日が暮れてからまた宿題を忘れたことに気づいた。

今度こそ先生も全員帰ってるだろうな、と思いながら学校に戻ったのだけど、また校
門が開いていた。

(……西住さんだ)

教室に行く以案の定、まほがいた。

電気もつけず、自分の机に座って頭を抱えていた。

迷った。

教室に入ったら、無視して帰れるような雰囲気ではない。

話をはじめたら確実に重い話になりそうだった。

そんな話に巻き込まれなくなかった。

でも、次の日に先生に怒られるのも嫌だった。

逡巡しながら教室の中を覗いていると、不意にまほが立ち上がった。

そしておもむろに机の横に移動して、何も無い机の上に視線を固定した。

視線だけではない。

体全体が電池の切れた玩具のように動きを止めてしまった。

虫でも見つけたのかな？

まず、そう思った。

それからすぐに

(いま出て行けば適当に「虫でもいるの?」って話からはじめられる。そうすれば重い話には発展しないはず。しそうなったとしても逃げられる!)

という考えも浮かんだ。

足を踏み出そうとした。

でも、私の足はそこで動かなくなってしまった。

いきなり、まほが机を蹴飛ばしたからだ。

机が飛んで壁にぶつかり、すごい音を立てた。

中に入っていた物が床に散乱した。

驚いていると、今度は散乱した教科書やノートをめちやくちやに踏みつけはじめた。

私はヘビに睨まれたカエルのように動けなくなってしまった。

見つかるのが怖くて、でも目を逸らすこともできなくて、ただ息を殺して固まっていた。

その間も、まほは気が狂ったみたいに自分の机だけでなく、周りの机も蹴っ飛ばして、引き倒して、めちやくちやにしていた。

どれくらい私が固まっていたかは覚えていない。

でもそんなに長い時間、あんな風に暴れられるわけがないから長い時間ではなかったはずだ。

だというのに、まほが落ち着いたところには見ていただけの私も疲れ果ててしまった。

まほも肩を激しく上下させているのが暗い中でもよくわかった。

逃げようと、やっと思った。

まほも落ち着いてきたようで、キョロキョロと周りを気にしはじめていた。

このままいたら見つかってしまう。

一歩だけ後退ろうとした。

しかし、竦んでいた足は上手く動かなかった。

何も無い廊下の上で、足が滑った。

尻餅をついた音が、やたらと大きく暗い校舎の中に響いた。

「誰だー！」

まほの鋭い声が聞こえた。

私は一目散に走り出した。

脇目もふらず、まっすぐに校門まで走って校舎を出た。

そこからスピードを緩めず走り通して、気づくと自分の家の前にいた。

もしかしたらまほが追いかけてきたかもしれないと思って、しばらく周囲を見回して

みたが、そんな様子はなかった。

私はほっと息を吐いて、自分の家に入って、そのままベッドに横になった。

また宿題を忘れたけど、そんなことは気にする余裕もなかった。

頭の中では、いつまでもまほが教室で暴れていた。

『何かしてあげないといけないんじゃない？』

その映像の片隅で、誰かが言った。

次の日、私は普段なら絶対に起きないような時間に起きて、学校に行く準備をしていた。

このくらいの時間なら先生も来ていないはずだ。

つまり、教室の様子も見られていない。

校門の前まで行くと、まほがいた。

何か覚悟を決めたような、けど爽快感は感じられない暗い顔で、じつと校門脇に立っている。

先生を待っているんだと一目でわかった。

先生に教室の惨状を報告するつもりなのだ。

ここに来て、また迷った。

私はたまたま教室に行っただけで何も悪くないのだ。

逆に見たくもないのに、あんな怖い物を見せられた被害者だとも言えるはずじゃないか。

迷っているうちに先生が来た。

しかも悪いことに生徒指導担当の怖い——というより、生徒を憎んでいるとしか思えない——先生だった。

「あの、先生」

「どうした西住？」

でも、まほはそんな先生が来たのに怯まず、覚悟の色を濃くして話しかけた。

そのときやつと覚悟が決まった。

「実は……」

「西住さん！」

私が声をかけると、驚いたようにこつちを見た。

「西住さん、一緒について言っただじやん」

重ねて言うと、まほは怪訝そうな表情をした。

こういうところで機転が利かないのは、まほの場合は欠点というより、美点だ。

私は、まほの横に立つと捲し立てるように言った。

「先生、実は昨晚、西住さんは戦車道の関係で夜遅くまで学校に残ってて、そこに私が宿題を忘れて学校に取りに来て……」

私がでたらめな説明をしていくと、先生の表情はどんどん呆れたように変わっていった。

私も自分で呆れるほど、口から出まかせを吐きまくった。

夜に宿題を取りに来たら教室にまほがいた、というところまでは本当だ。

でも、まほをお化けだと思ったとか、まほは私を不審者だと思って取っ組み合いになって机を倒してしまったとかは完全に嘘だ。

はじめ、先生は話を信じていないようだったけど、まほが黙り込んでいるのを見ると、それをどう解釈したのか

「とりあえず教室を見てみよう」

という話になって、私とまほと先生の三人で教室に行くことになった。

教室の惨状を見ると、先生は

「酷いな……」

と呆然と言った。

私も驚いた。

暗い中だと見えていなかったのだが、机は脚が折れ曲がってしまっていて使い物にならないそうだった。

散乱した教科書にはくつきりと足跡がついてしまっていて、とても人前に出せるものではなくなっていた。

故意だとしたら、よほどの悪意をもっていないとできないだろう。

ましてや品行方正で、有名人で、高校戦車道最強の名門・黒森峰女学園の隊長で、戦車道の家元西住家の長女がしたとは信じられない惨状だった。

それよりは、暗闇の中でお互いをお化けだと勘違いした生徒二人が半狂乱になって格闘した結果こうなった、という出鱈目の方が信じられたのだろう。

「怪我はなかったのか？」

と、先生は言った。

「はい、奇跡的に」

という私の言葉も先生は信じたようだった。

「俺は教科書の予備がないか確認してくるから、お前らは机と椅子の予備を持ってこい」

と言つて、職員室の方に去つていった。

「……どうして」

先生が見えなくなると、まほが言った。

「いいから！」

私がそういうと、まほは少しためらったあと素直にうなずいて

「……ありがとう」

と、気恥ずかしげに言った。

クラスメイト達が登校してくる時間になると、続々と机を運んでくる私とまほが彼女たちの話題をかっさらうことになった。

「どうしたの?」

と聞いて来るクラスメイト達に、私は先生に言ったのと同じ出まかせを言った。私がいくら言っても、みんな疑っているようだったが、まほが

「その、なんとというか……ビックリしたんだ」

と言うと、みんな信じたようだった。

信頼されているというのは得だ。

ちなみに私が宿題を忘れたことは許されず、先生に怒られた。

Side 砲手1

まほが転校してしまってから、まほは様子がおかしかった。

どこが、というとはつきり説明できない。

まほは表情を変えなかつたし、仕事を黙々とこなすのも変わらなかつた。

ときおり上の空になっている、というありがちな症状も見受けられなかつた。

強いて言えば、指示に日々違和感を覚えた。

『私が予想していたまほの指示』と『まほが実際に出す指示』

この二つが食い違う。

いつものように

『この指示に従っていたら勝てる』

という確信も持てなかつた。

弱小チームが相手ならいいとしても、聖グロやプラウダが相手だったら見破られてしまうのではないかと感じてしまうのだ。

もちろん、まほのことだから意味のない指示を出したわけではないらしい。

意図を聞けば納得できる答えが返ってきた。

だから、これも私の思い過ごしかもしれない。

他の隊員は何も違和感を感じていない様子だったこと。

ある日を境に全くいつも通りに戻ったこと。

これらも考え合わせると私が大げさだっただけなのかもと思えた。

けれど、それまでのまほを見ていて私は

「責任を感じるあまりに変な気を起こしているんじゃないか」

と思わずにいられたのは確かだ。

「砲塔旋回……ここが決めるぞー」

まほの号令で、遠くに飛んで行っていた思考が戻ってくる。

敵のティーガーIIが猛スピードで照準器の視界を横切ったのが見えた。

それに合わせて砲塔を旋回させる。

小学校のときから血を吐くほどやってきた動作だ。

すぐにティーガーIIを照準の中心に捉えた。

「レンー」

まほが私の名を呼ぶ。

肩に乗せられた手が

『撃てー！』

と言う。

撃発レバーを引く。

爆発音が車内に響いて、車体が揺れる。

揺れが収まると、ティーガーIIが動きを止め、煙をあげているのが見える。

敵チームの主将であるエリカがキューポラから体を乗り出し、悔しそうに拳で車体を

叩いた。

勝った。

まほを振り返る。

目が合う。

うなずく。

まほもうなずいて、首元の無線機に手を当てた。

「ティーガーIIの撃破を確認。よって副隊長チームの全車両の撃破が確認された。以上をもつて今日の紅白戦および練習は終了とする。ご苦労だった」

私はホッと息を吐いて、隣で同じように息を吐いていた装填手とハイタッチを交わ

す。

彼女はアカネ。

一年生の優秀な隊員で、本来であればパンターの車長枠でレギュラー争いに加わるくらいの子供なのだが、まほの

「黒森峰が常勝であるためには下級生の、特に車長の教育が必須だ。そこで優秀な下級生を装填手として隊長車に乗せ、直に技術を学ばせたい」

という方針のもと、隊長車の装填手になったのが彼女だ。

下級生の中では、すでに上級生に混じって車長を務めている副隊長のエリカ、赤星に次ぐ三番手ということになるだろうか。

「やったな」

「レン先輩も、お見事でした」

「お前も装填のスピード、タイミング、どっちもバッチリだった」

「えへへ、ありがとうございます」

「でも、満足するなよ。お前の役目は装填するだけじゃない。むしろ、まほや私たちのことをよく見て、次の世代で車長になるのが目標だっていうのを忘れるなよ」

「はい！」

次に通信手のユリに視線をむけた。

彼女は青森県の出身で、しかも高校から戦車道をはじめたという黒森峰では異例の存在だ。

ただセンスは抜群だし、努力も怠らない性格。

その頭脳の明晰さと社交性でレギュラー通信手としての地位を確立すると、ついに隊長車の通信手に収まってしまった。

「ユリはやることなかっただろ」

「……」

「どうした？」

「……」

反応がない。

腕を組み、何か思い詰めた表情で目の前を凝視していた。

何を言っても無駄なようだから、まほに視線を向ける。

ちよほど話が終わったようだった。

私はペンをマイクに見立てて握り、まほに向かって差し出した。

「西住まほ選手、五対一での紅白戦は今回も完勝でしたね。どうですか、今回の感想は？」

私のふざけの入ったインタビューに、まほは生真面目な顔で頷いた。

「私の車両に関しては問題ない。アカネについてもお前が言ってくれた通りだ。心配なのはエリカだな。いつもの精彩を欠いている」

「みほのこと相当意識してたからなあ……まあ、エリカならそのうち立て直すだろ。ガッツあるし」

「そうだといいいんだが……副隊長をやってもらうにしても、少し時間を置くべきだった。」

まほが暗い顔で言った。

私は話を変えることにした。

「私はエリカより、お前の方が心配だったんだが、もう大丈夫なのか？ みほが転校するって言いはじめてから三日前まで酷い顔してたぞ。私なんかは『責任感じて自殺でもするんじゃないか』って思ってたくらいだ」

「そんなにひどい顔だったか？」

「ああ酷かった。目の隈なんて、こんな色だった」

私は自分のパンツアージャケットをつまんで見せた。

すると、まほが自分の目の下を擦りはじめたので、笑ってしまふ。

「安心しろ、もうないよ」

「む、そうか」

「どうやら本当に大丈夫なようだ。」

「まあ、心配なら今夜にでもエリカと二人でメシでも行ってみたらどうだ？ エリカなら喜んで来ると思うぞ。」

「……話しにくい隊長が誘ってきたと思われなさそうか？」

「思われぬよ、間違いない。」

「わかった、お前が言うならそうしてみよう。」

「ほいよ、お疲れさん。」

「ああ、お疲れ。」

まほはそう言つて降りていった。

これで戦車の中にいるのは私と、装填手のアカネ、通信手のユリと、操縦手のメイの四人になった。

私は他の三人に向かって言った。

「今日は予定通り、私の家でいいか？」

「……」

三人が頷くのが見えた。

「じゃあ、決まりだな。」

こうして隊長車の四人が集まるのは、私たちが同じ戦車に乗るようになってからの定例になっていた。

誰かの家に集まって反省会をするのだ。

誰が言い出したのでもなく、自然にそうなったのだ。

まほの足手纏いにならないため。

四人とも口に出さなかったが、それが共通していたから、そうなったのだろうと私は思っている。

でも、今日は話の進みが悪かった。

原因はいつも話の進行役になるユリが何やら懽然としていたからだ。

「今日は元気がないな」

そう言ってやると、ユリはお化けのような青白い顔を向けてきて

「……泥棒猫です」

と言った。

何のことかわからなかったのは私だけではなかったようで、場が白けた。

仕方なく何のことだと聞いてやると、彼女は机に突っ伏して叫ぶように言った。

「まほさんが！ 私のまほさんが！ 泥棒猫に盗られてしまったんです！」

叫ぶように言うなり、ユリは「ウワアア！」と声をあげて泣き出した。「どうしたんですか！」

と驚いたアカネがなだめても、私が「どうどうどう」と背中をさすってみても、どうにもならない。

仕方なく、私はメイに視線を向けた。

ユリとメイとまほ。

この三人はクラスが同じなのだ。

その彼女がわからないとしたら、もう本当にどうしようもない。

しかし幸い、メイは心当たりがあったようで

「最近、まほと茅野ユウの仲がいい」

と、最近ちよつとした話題になった人物の名前を出した。

「まほと喧嘩して勝ったっていう茅野ユウか？」

確認のために言ってみると、メイが頷いたので私は慌てて続けた。

「まてまて、それは誤解だったって話だろ。まほもそう言ってたし、第一まほが喧嘩なんかするわけ……」

そこまで言つて、私はある可能性にたどりつく。

この噂が聞こえてきたのは、まほが立ち直った——ように私には見えた——日の翌日

か、その翌々日くらいだった。

聞いたときは、そんなことがあるわけがないと気にも留めなかった。

けどタイミングを考えれば、むしろ喧嘩があつて、それを切欠にしてふっ切れたと考えた方が自然なのではないか。

あの時は、まほの溜めていたストレスが凄まじかったのは周知の事実だ。

喧嘩をしないなんて思い込み過ぎないと言われれば、そうとも言えた。

実際にしてしまったのだとしても、まほの立場を考えれば教師が隠そうとするだろう。

まほも自分の身一つで済む不祥事なら隠すようなことはしないだろうが、学校全体に迷惑のかかりそうな大問題となれば話は別だろう。

私の考えが暴走気味になったところで、ユリが言った。

「少なくとも、あの夜に何かがあつたのは、間違いありません」

それに黙っていたアカネが反応する。

「根拠があるんですか？」

「教室がメチャクチャになつてたのは私がこの目で見てます。それにまほと茅野ユウの言い訳も、到底信じられるものではありません」

まほと茅野ユウの言い訳というのは、互いを不審者だと思つて取っ組み合ったというやつだろう。

たしかに考えてみれば嘘くさいことこの上ない。

話に聞く教室の惨状が事実だったとしたら、まほが足を打ち付けただけで茅野ユウは怪我もしていないというのは無理があつた。

「そうです！」

いきなりユリが顔をあげて言った。

「夜の校舎に二人きり、これで何も起きないはずがありません！ きつとあの夜、まほは茅野ユウに甘い言葉で誘われて、間違いを犯してしまつたに違いないんです！」

私はチラツとユリに視線を向け

「ああ、最近はこちらよつとの休み時間にもわざわざ茅野ユウの席まで行って話をしたり、食堂にも茅野ユウを誘つて……それをいいことにあの女狐ときたら、まほの食事にまで口を出しはじめたんですよ！ 信じられますか！」

「うるさい、黙れ」

ユリを遮つた。

話が脱線したが、この集まりの目的は訓練中の反省をして、技術を向上させることにある。

気にならないと言つたら嘘になるし、今まで話に参加してしまつていた私が言うのもなんだが、まほは『あの夜』以降、いい方向に行っているようだ。

なら、私たちが口を出すことではない。

私は言った。

「結局、まほと茅野ユウが何も言わないなら、私たちに確かなことはわからないんだ。茅野ユウと仲良くなっただけで元気がなくなつたわけでもないんだろ？ だつたら私たちができるのは、反省会をちゃんとやって、まほの負担を軽くすることだ。違うか？」

三人は納得してくれたようだった。

それぞれ頷いて反省会を再開することになった。

でも

（本当に、何があつたんだろうな？）

その疑問は解決されないまま、私たちの胸に残ることになった。

Side クラスメイト2

あの夜から私はまほを観察するようになった。

それにともなつて、まほの私が考えてもいかなかった性格が見えるようになってきた。成果は大きく分けて、二つある。

その内の一つを象徴する話として、カレーの話なんかはうつつつけの話だろう。

私とまほが一緒に先生に謝った、次の日。

まほから食堂に行かないかと誘われた。

お礼に何かをおごらせて欲しいということだった。

黒森峰の食堂は品ぞろえが豊かだ。

ドイツ文化の影響を強く受けている学校だけあつて欧風料理はあるし、みそ汁なんかの和風料理もある。

しかもレストランよりも美味しいと評判だった。

ちよつと値も張るのが難点という話だったので、私なんかの庶民は羨ましく思いつつも近づいたこともなかったから、この申し出は嬉しかった。

食堂に着くと、まほから解説を受けながら聞いたこともないドイツ料理を頼むことにして、まほに伝えた。

まほは頷いて、食堂を運営する栄養科の生徒に

「彼女にアイスバインを頼む」

とだけ言った。

自分の注文は言わなかったのだ。

「西住さんは食べないの？」

栄養科の生徒が行ってしまったあとで私は聞いた。

私にだけ料理を食べさせて、自分は我慢するつもりじゃないかと思ったのだ。

そうだとしたら、さすがに落ち着いて食べられない。

でも心配は杞憂だったようで、まほが答えるよりも早く、私にも馴染みの深い香辛料の香りが匂ってきた。

それを私たちの座るテーブルに置いた栄養科の生徒が言った。

「西住さんはこれだよね」

「ああ、ありがとう」

それを見た瞬間、ある噂が思い出された。

『西住隊長はカレーしか頼まない』

という噂だ。

一時期、まほのファンや戦車道をやっている生徒が噂し合っていたから、黒森峰の生徒ならみんな知っているほど有名な噂だった。

いつの間にか聞かなくなつたから、まあ何らかの決着がついたのだろうと思つてはいけれど、私は興味もなかつたし、結末を知ろうとしなかつた。

だけど、これでどんな決着がついたのか察することができた。

どう見てもカレーしか頼んでいない。

それがわかつたから噂がなくなつたのだろう。

わかりきつたことを噂にするほど、女子高生は暇ではないのだ。

しばらくして私の頼んだ料理もやってきたが、私の意識は完全にまほのカレーに持つて行かれたままだった。

「西住さんって、本当にカレーしか頼まないの？」

思い切つて聞いてみた。

まほは

「そんなことはないと思うが……」

と言いながら、料理を持ってきてくれた栄養科の生徒を見た。

彼女はうなずくと、まほと話しはじめた。

二人はそれなりに親しい間柄らしかった。

「たしかに入学以来、カレー以外は注文されたことないね」

「そうだったか？」

「うん、結構、噂にもなってたんだよ？ 『西住隊長がカレーしか頼まないのは自分をコントロールするための訓練なのだ』ってね」

この話も『カレーしか食べない』という噂と一緒に、私の耳にも届いていた。

「……好きだから頼んでいるだけなんだが」

「わかってるって。西住さんがカレー食べる姿って、作る側としてはすごく癒されるんだよね。大好きだって伝わってくるよ」

「……」

栄養科の生徒が、まほの肩をポンポン叩いた。

まほは答えずに視線を落としてスプーンを動かしはじめた。

このときの私には、表情に現れた変化がわからなかったが、今になって思うと照れていたのだろう。

それはそうと、このとき私の頭に浮かんできたのは『健康に悪いのではないか』という疑問だった。

おせっかいかなど思いつつ、言わずにいられなかった。

「ねえ、西住さん。栄養のバランスとか、ちゃんと考えてるの？」
どうも、そうとは思えなかった。

まさか朝昼晩、三食カレーというわけではないだろうが、昼だけでも全てカレーだとすると栄養バランスは崩れるだろう。

案の定、まほはスプーンを止めた。

それから栄養科の生徒を見た。

「まあ、良いとは言えないよね」

そう栄養科の生徒が答えた。

それに続いて私は言った。

もう気分は、まほの母親だった。

「好きなのはわかるけど、ために色々な料理も食べてみたほうがいいんじゃない？」

それからは私も食堂でお昼を食べるようになった。

料理が思っていた以上に美味しかったからというのもある。

けど主な理由は、まほがバランスの取れた食事をしているか監視するためだ。

まほは戦車道の仲間と食堂に来る。

その時に食べているものを盗み見るのだ。

最初の一週間は、ちゃんと色々な物を食べようとする努力が見られた。

「へえ、まほがカレー以外なんて珍しいな」

なんてことを一緒にきた戦車道の隊員に言われながら、焼き魚定食、ラーメン、野菜炒め、ハンバーグと色々な物を頼んでいたようだった。

しかし翌週には、ビーフシチュー、ハヤシライス、肉じゃが、ハヤシライスと何やら雲行きが怪しくなってきた。

二度目のハヤシライスの日、一瞬まほと目が合ったが、すぐに逸らされた。

次の日、あえて時間をずらして食堂に行ってみた。

すると、食堂の隅で一人こそこそとカレーを食べているまほを見つけることができた。

スプーンの動きがハヤシライスのとくとは比べ物にならないほど早い。

私は気づかれないように後ろから近づいて、耳元でささやいた。

「またカレー食べてるの?」

この時のまほの反応は、見物だった。

ビクツと体を跳ねさせてかと思うと、激しく咳き込んだのだ。

みんなの憧れ『西住まほ』とは思えないほどの慌てぶりだ。

「そんなんじや、隊員に示しがつかないんじやないの?」

すこし大げさに呆れた様子を作って言っていると、まほは

「……仕方ないだろう。好きなんだ」

と言いつて、スプーンを一層はやく動かした。

その顔は私にもわかるほど、赤く染まっていた。

つまりだ。

『結構かわいい』

これが第一の発見だ。

もう一つは、まほは私が思っていた以上に戦車道の履修生たちに頼られている、ということだ。

クラスには戦車道履修者が八人いる。

まほは休み時間のたびに、その八人と別のクラスからやってくる生徒に囲まれる。

最強を誇る黒森峰戦車隊の面々は向上心も旺盛なようで、暇さえあると、まほを質問攻めにするのだ。

昼休みともなれば同学年だけでなく、さらに下級生まで集まる。

それでクラスの皆に迷惑がかかるから昼ごはんは食堂で食べることにしているんだ、と前に教えてくれた。

私が食堂を覗きに行つたときもそうだった。

まほはいつも尊敬の眼差しを自分に向ける履修生たちの中心に座り、次々に投げかけられる質問に答えながら食事をとっていた。

青春をスポーツに捧げる女子高生たち。

戦車道ファンの生徒や先生たちは、この集まりをそう見ているに違いなかった。

この光景を何も知らずに見たら、余計にそう思うだろう。

私自身、この光景と、この光景をあらわした『青春をスポーツに……』という言葉に疑問を持ったことはなかった。

でも、このときの私にはそれらが歪なものに見えて仕方がなかった。

いや。

青春をスポーツに捧げる女子高生たちの中心にいる西住まほ。

深夜の学校で狂つたように暴れていた西住まほ。

この二つが現実存在しているのは、絶対にあつてはいけないことだった。

まほは皆の信頼と期待のせいで、ああでもないストレスを吐き出せなくなつていったのだ。

クラスで授業を受けているときなど、私は後ろの席からまほの背中を眺めながら、こんなことを考えていた。

(そもそも、西住まほがどんな人なのか知っている人が、どれだけいるんだろう)

もしかしたら誰も知らないんじゃないだろうか。

それどころか、まほが二十歳にもならない高校生だということすら忘れていないのか。

だからこんな風に、どう考えても重すぎる尊敬と期待を一人の女の子に背負わせて平気な顔をしていられるのではないだろうか。

いつだったか、戦車道ファンの友達に聞いてみたことがある。

「いくら何でも、戦車道の履修生って西住さんにベツタリくつき過ぎじゃない？ あれじゃ西住さん、ちよつとした息抜きもできないよ」

すると、友達は私を不思議そうな目で見て

「だって、あの西住さんだよ？ あの西住さんが、そのくらいのこと気にするかなあ」とだけ、答えた。

私は黙り込むしかなかった。

本音で話し合える友達でもいたらと思つて辺りを見渡しても、そういう人物はいそうになかった。

まほと同じ戦車に乗っているという本条メイさんと吉川ユリさんはどうだろうと二人の様子も見ていたのだが、どうやらこの二人も違う。

たとえば戦車の操縦手だという本条さんとの絆が深いのはわかる。

二人ともお互いが目を合わせただけで、相手が何を思っているのかわかるらしい。けど、まほが頼れるかというところ、何となく違う気がした。

通信手の吉川さんもそうだ。

彼女は口下手なところのあるまほの言葉を過不足なく補うという、相互理解の必要な仕事をしている。

でも、まほの方に何となく遠慮がある。

まほは二人を信頼している。

それは確かだ。

他の戦車道の履修生たちのことも、少なからず信頼しているようだ。

こんなに信頼できる友人に囲まれて、羨ましいくらいだ。

でも、その信頼関係は、まほを相手の方が『誰にも負けない凄い人』と勝手に決めつけてしまうことで安定しているように見えた。

だから、まほは仲間に相談できなかつたのではないか。

だから、仲間たちも、まほの悩みに気付かなかつたのではないか。

だから、まほは夜に一人で頭を抱えていたのではないか。

まほに必要なだったのは、そういう内面に踏み込むことができる友達なのではないだろ

うか。

そう思った私は、めずらしく勇気を出すことにした。

十二月の、そろそろ冬休みに入ろうかという日の授業が終わったあと。

戦車道の練習に向おうとするまほを捕まえて言った。

「ねえ、西住さん、次に熊本に寄港したら一緒に遊びに行かない？」
断られるかも思っていた。

けど、まほは意外に悪い顔をしなかった。

「ああ、わかった。練習が休みの日が決まったら連絡しよう」

このことはクラスメイト達の間でかなり噂になったようだった。

Side 砲手2

「緊急事態です！」

冬休みに入る前、ユリがメイを連れて私の教室に入ってきたのが始まりだった。

話を聞いてみると

『まほが茅野ユウと冬休みに遊びに行くという約束をした。茅野ユウが何をするかかわらないから私たちも追って行こう』

ユリの話はそう言うことだった。

もちろん反対した。

たしかにまほが誰かと一緒に遊びに行くなんて言い出したのは初めてのことだったが、まほだつて高校生だ。

遊びに行くことだつてあるだろう。

そう言おうとした。

けど、心のどこかで

（まほと茅野ユウは、どうして急に仲が良くなったのか）

という抑えてきた疑問が膨れ上がるのは、どうしようもなかった。そこにユリが

「行つてくれないなら私だけで行きます。一緒の戦車に乗る仲間を見捨てるんですか！」

なんて言い出して、メイまで同調しだしたものだから、それ以上は反対できなかつた。そんなこんなで私とメイはユリに連れられて、十二月末の体が震えるような寒空の下、防寒具を完全装備してまほと茅野ユウをストーキングしているのだった。

私たちの視線の先では、まほと茅野ユウが大型のスーパーに入つていった。地元では、何でも売っていると評判の店だ。

友達とスーパーという大変な感じがするが、中にはファミレスとかも入っている。適当に時間を潰すにはもってこいの場所だ。

「どうする？ 私たちも中に入るか？」

「いえ、それでは気づかれてしまいます。私たちも何か食べながら外で待つていることにしましょう」

ユリの指示に従つて、駐車場のベンチに三人で腰を下ろした。

ちやうどテーブルに座っているまほの横顔が見えた。

のぞき見しているという罪悪感が刺激される。

それから逃れるため、黙っているメイに話しかけた。

「なあ、前にこうやって、みほの後ろをつけたの覚えてるか？」

「……みほの初めてのおつかい？」

「そうそう」

話し始めると、私の頭は小学生のころの記憶を思い出すのに精一杯になる。

当初の目的通りに罪悪感は薄れてきた。

「なんですか、それ？」

「昔のことだよ、お前は知らないだろうけど」

小学四年生のころだったはずだ。

あのときも冬だった。

まほから突然電話がかかってくる

「みほがおつかいに行くみたいだから、その様子を見守って欲しい」

と、私とメイが駆り出されたのだ。

みほがおつかいに行く時間はわからないということだったので、私たちは朝早くから西住邸の前で張り込むことになった。

「いま思うと師範は、わざと県大会の授賞式でまほがない日にしたんだろうな。絶対みほに付いて行くから」

「……私もそう思う」

当日、雪も降っていた。

地面には霜が降り、道路のいたるところが凍結して滑りやすくなっていた。

そんな寒空の下、私とメイは二人で雪だるまのように防寒着を着込み

「まほは人使いが荒い」

「お土産を買ってこなかったら同じ目にあわせてやる」

なんて愚痴を言いあいながら、みほが出てくるのを待っていたのだ。

「あのとときから、まほはシスコンだった」

「そうだよな、『みほが転んだけど、大丈夫そう』ってメール送ったら、すぐ電話かけてきて『ほんとに大丈夫なのか、血は出てないのか』って言うから『お前は表彰式に集中してろ』って怒鳴ってやったんだ」

みほが出てきたのは結局、昼過ぎだった。

私たちは寒さに耐え、おまけに空腹にも耐えながら尾行をはじめたわけだ。

でも、本当に大変なのはそれからだった。

みほが寄り道はするし、道路の真ん中で転ぶし、声をかけてきた変なおっさんについて行こうとするし、三十分おきに

「みほは大丈夫か？」

という電話がかかってくるので、私たちは大忙しだった。

おつかいが終わって帰ってきたときには日が沈みかけていた。

私たちは倒れそうになりながら、みほが西住邸に入っていくのを見届けたのだった。

「前から聞いてましたけど、ホントにベツタリだったんですね。私が見てる中だと、そんな印象ないですけど」

「たしか小学校六年くらいのおときか。恥ずかしいからって言われてやめたんだよ」

「辛そうだった」

この時も電話だった。

世界の終わりを目の当たりに行っているような声で「みほに嫌われたかもしれない」と言ってきたのは、五年以上も前なのに鮮明に覚えていた。

「あ、出てきました」

ユリの言葉で、過去に向いていた頭が帰ってくる。

見ると、まほと茅野ユウが店から出てくるところだった。

二人とも入った時にはもっていかなかった手提げ袋をぶら下げていた。

「まほなら似合うよ！」

そんな言葉が茅野ユウの口から聞こえたところから考えると、まほがめずらしく服を買ったらしかった。

「ぶ、プレゼント……？　しかも服う!？」

ユリが目を見開きながらそう言ったのを無視して、私たちは二人のあとを追って移動した。

次に二人が入って行ったのは戦車道の専門店だった。

熊本県では最も大きくて、県下の戦車女子なら誰でも一度は使ったことがあるという店だ。

当然、私も使ったことがあるから内装もよく知っている。

出入口が四方と上の階にもあるから、さっきのように外で待ち構えていると二人を見失う可能性があった。

ユリに聞いた。

「どうするんだ？」

このときにはユリも正気に戻っていた。

「入るしかなさそうですね。ここは見つかってしまったら白を切つて偶然ということにしましょう」

「まあ、そうなるわな」

といつても見つかриたくはないので近くの店で見繕ってきた帽子とマスクで変装して、店に入る。

店内を歩くと、すぐに二人の姿を見つけるとができた。

私たちは戸棚の陰に隠れた。

そこはまほと茅野ユウとの会話がよく聞こえた。

「整備用の油、砲弾、戦車の模型……へえ、いろいろ売ってるんだね」

「戦車道に必要なものは全部あるという評判だからな」

「でも、必要な物は全部もってるんでしょ？ 何か買うの？」

「戦車道関連の情報誌だ。戦車道は比較的マイナーな競技だが、コアなファンが多い。

だからこういう雑誌には質の高い情報が載っているんだ」

「ふーん？ やっぱり情報収集してから戦いに臨むってわけなんだね」

「そうだ。『敵を知り、己を知るは百戦危うからず』とは、古代中国の言葉だが、現代の戦車道にも当てはまる」

チラツと顔を出してみると、まほは言葉通りに戦車道の情報誌に視線を落としていた。

その肩越しに茅野ユウがのぞいていた。

近い、離れる、泥棒猫が。

すぐ横でユリが苛ただしげに言った。

それは無視して、まほと茅野ユウの会話に集中する。

「え、なに、戦車にティーポット常備って、どういうこと?」

「聖グロはイギリスの影響が強いからな。まあ、イギリス人が戦車で戦っているときも紅茶を飲んでいるかというところ……私も首をかしげるが」

「ああ、そういう変わった高校なんだね。次の記事は……え!? 『新隊長カチューシャが大粛清を断行! 七選手をシベリア送りへ!』って、どういうこと!? 学生なのに!」

「いや……プラウダの記事は字面だけ見ると驚くかもしれないが、隠語のようなものだ。要するに学園艦の底部で作業や補習をさせられる、ということらしい」

「あ、そうなんだ、よかった……って『継続高戦車窃盗容疑、ついに裁判に発展か!』ってなに!? これも隠語!」

意外と距離が近いんだな、と、まず思った。

大抵の間隔は、まほと距離を置いてしまう。

別に、まほが人を遠ざけているというわけではない。

けど、普通の人間は尊敬してしまつて友達になるという発想すら湧かなくなるようなのだ。

まほの方も積極的に友達を作ろうというタイプではないから、大抵は最初の関係で固定されることになる。

そこへいくと、茅野ユウは珍しかった。

まほと茅野ユウがクラスメイトになったのは、今年の四月だ。

急に仲が良くなりだしたのは夏の大会後の八月。

やはり、あの夜、何か事件があったのではないか。

数カ月前からの疑問が、また大きくなってきた。

それも、かなり深刻な事件でないと、ここまで親しくなることはできないのではないかと思えた。

「あつ、移動するみたいです」

まほたちを追って、私たちも移動する。

次はファミリーストランだった。

窓際に座ってくれたので、外からでも様子が十分にわかった。

「これなら中に入る必要はないな」

「そうですね。ちょうどいい時間ですし、お昼にしましょうか。私は監視に集中するので、お二人が先に食べてください。あとで交代しましょう」

ファミレスを監視できる位置に都合よくあったベンチに座り、ユリが作ってきたという弁当を広げる。

なかなか美味そうな弁当だ。

メイは真つ先に箸をつけて勢いよく飲みこんだ。

私も箸をつける。

思った通り、なかなか美味い。

メイと話しながら食べていると、弁当はすぐになくなった。

私はユリに声をかけようとした。

「ユリ、終わっ……」

「アアアアあああああああ!!」

そのユリが断末魔のような叫び声をあげはじめたのを見て、私は咄嗟にまほの姿を探した。

すぐに見つかった。

たぶん、他の誰が見ても何とも思わないだろう自然さで、スプーンでカレーをすくっているところだった。

でも私の場合は違った。

そのまほの表情が視界に入った瞬間、私の記憶の中の、ある特定の瞬間の映像が繰り返しフラッシュバックされた。

それは小学校の低学年のころ。

私も戦車に乗りはじめたばかりで、砲の撃ち方さえわからなかったころ。

まほとメイと私の三人で豆戦車に乗り、何もわからないなりに戦車に乗ることを楽し

んでいたころ。

そのくらいのときに、まほが浮かべていた笑顔の映像。

まるであの時のような笑顔を茅野ユウに向けて浮かべていた。

戦車道界のヒーロー西住まほの浮かべる愛想笑いではない。

いつの間にか見なくなっていた、年相応の笑顔。

あまり感情を表に出さないまほの信頼をあらわす笑顔。

手の中にあつた箸がポトリと落ちた。

いつからまほの笑顔を見なくなっていた？

最近、ではない。

高等部に入るよりも前、中等部でもない。

それこそ小学生の時だ。

それも卒業するときには、もう見なくなっていたのではないか。

じゃあ、なぜか。

なぜ、笑顔を見せてくれなくなったのか。

なぜ、私に向けてくれなくなった笑顔を、茅野ユウに向けているのか。

答えとして一つの考えが浮かんだ。

私は立ち上がった。

「帰る」

もうこの場にいるのも辛くて、それだけ言って帰った。

Side クラスメイト3

春になり、私たちは三年生になった。

このときには、まほと私はお互いに下の名前で呼び合うようになっていて、二人だけで話をすることも増えた。

私も戦車道に興味が出てきて、この日は練習試合を観戦させてもらうことになった。た。

相手はサンダース大付属高校。

資金力に物を言わせた物量を武器にするチームで、四強の一角と言われている。

同じ九州を本拠地としているため、練習試合で戦うことが多いのだそうだ。

隊長のケイさんという人について、まほが試合前に

「誰とでも良好な関係を築ける快活さと、全国最多を誇る部員たちに慕われる人望、そして慕われつつも締めるところは締める統率力をもった相手」

という風に教えてくれた。

試合時間の三十分前になると、試合会場になっっている原っぱの向こうから凄い数のト

トラックと戦車が向かってくるのが見えた。

「Hey! まほー! 久しぶりー!」

そのサンダースの戦車の一つからブロンドの髪が頭を出しているのが見えた。手をメガホンのように口に当てながら、大声で何かを言っている。

彼女がケイさんだ、と一目でわかった。

戦車道の隊長を務めている人は、どこか他の人とは雰囲気が違うので何となくわかる。

「ヤッホー!」

そのケイさんが観客席に向かってアイドルのように手を振った。

太陽のような明るい笑顔が私たちに向けられる。

すると、まだ黒森峰の生徒しかないはずの観客席からも歓声が上がった。

戦車とトラックの大軍団は、観客席の前まで来ると一斉に止まった。

「選手は整列! 補給隊は準備開始!」

ケイさんが指示をだす。

すると、サンダースの生徒がサッと降りてきて動き出した。

戦車から降りてきた生徒たちは、すでに整列していた黒森峰の戦車隊と向き合うよう

に横一列に並ぶ。

トラックから降りてきた生徒たちは、何やら屋台のようなものを準備しだした。

一段落すると、列から離れてケイさんが前に出てくる。

黒森峰の列からも、まほが進み出た。

「来てくれてありがとう、ケイ」

「ノーブログレム！ お互い様だって」

二、三、言葉を交わして握手する。

試合前の礼も終わると、ケイさんがもう一度、観客席に向かって手を振った。

今度はサンダース側の応援団もいたからか、耳栓が欲しくなるほどの大喝采になった。

それに答えるようにケイさんがさつきよりも大きく手を振り返すので、ますます盛り上がってくる。

すごい勢いだ。

一方のまほは静かに黒森峰の列に戻って戦車に乗り込んだ。

その姿はサンダースのケイさんと比べると、すこし地味だった。

不安になった。

もしかしたら、まほは負けてしまうんじゃないか。

そのときは何て言葉をかければいいだろう。

ケイさんも自分の戦車に乗ると、両校の戦車が初期位置に移動をはじめた。

戦車が私たちの視界からなくなって、かわりに観客席前のスクリーンに両校の配置が映し出される。

公式戦でもないのにスクリーンが置かれているのは、もともと試合後の反省会に使うために映像は撮影していたので、どうせなら観客にも見てもらおうと考えて設置したのだという。

同じ理由で、隊長のマイクが拾った音もスクリーン横に設置されたスピーカーから聞こえるようになってきているそうだ。

しばらくして、スクリーンに『試合開始』という表示がされた。

「パンツアーフオー！」

「Go ahead!!」

同時に二つの号令が聞こえた。

スクリーンには、まずケイさんの姿が映し出される。

『行けー！』という風に力強く突き出された腕、顔に浮かぶ不敵な笑み、ケイさんの後ろに映る整然とした二十両の戦車隊。

それは事前に聞いていた話より、もっと端的にサンダースが強いチームだということを示していた。

いつの間にか私は手を強く握っていた。

不安が、さつきよりも大きくなっていった。
でも。

スクリーンの映像が切り替わって、まほの姿が映し出された、その瞬間。
ケイさんのように派手なポーズは取っていない。

表情もいつもと変わらない。

ただキューポラから体を出して、風に髪を揺らされながら前を見つめている。
ただ、それだけの姿が映し出された、その瞬間。

(あ、勝った)

と思った。

そして事実、その通りになった。

このときの昂ぶった感情を、どう表現すればいいのか。

友達の凄いところを見た興奮、というだけでは説明がつかない。

熟練の技術を見たことに対する感動、というのも違う。

二つを合わせたものというのも違う。

そんな程度じゃなかった。

上手く言えないが、お腹の底の方が熱くなってきて、悲しいわけでもないのに涙が流れてきて、子供みたいに声をあげたくなるような、そういう昂ぶりに襲われた。

まほの顔を見つけると抱き付かずにはいられなかった。

無理やり体を抑えつけるようにして、たつぷり、めちやくちやに

「まほ！ 凄いい！ すごくかった！ カッコよかった!!」

と自分の感動を喋り散らした。

「ユウ……」

かなり長い時間のあと、まほが恥ずかしそうに言ったので、やっと手を離れた。

だけど、まだ喋り足りなかった。

自分の感じたことを十分の一も吐き出せていないような感覚だったので、口だけは動かし続けた。

「ユウ！」

もう一度、さつきよりも強い声で名前を呼ばれた。

それでやっと正気に戻った。

冷静になった目で見ると、まほは居心地悪そうに顔を赤くして、私の後ろに視線を向けているのがわかった。

何かあるのかな、なんて呑気に考えながら振り向くと、すこし前に覚えたばかりの顔

があった。

銀の髪と気の強そうな目。

副隊長の逸見エリカちゃんだ。

彼女が微妙な表情で、私を見つめていた。

「エリカ、何かあったのか」

まほが表情を整えていった。

さすがはまほだけあって、もう顔の赤みは引いていた。

「あ、はい。反省会が始まるので、お呼びに……」

エリカちゃんがチラチラと私を見る。

どうやら、私のせいで反省会というのに遅れてしまっているらしい。

気まずかった。

まほが後輩に謝りつつ、私に視線をくれる。

とりあえず

「ごめん」

と謝った。

向き直って、エリカちゃんにも頭を下げる。

「ごめん、はじめて試合見たから興奮しちゃって……」

「あ、いえ、私もはじめて隊長の試合を見たときは興奮しましたから、気持ちにはわかりません」

エリカちゃんがそう言ってフォローしてくれるのが辛かった。

まほが「いや、私の方が忘れていたんだ」と、後輩に弁明してくれているのが、余計に辛かった。

いたたまれなくて、そそくさとその場を離れた。

サンダースが設置してくれたトラック屋台がいくつも出ているから時間を潰すのは簡単だ。

ホットドック、ハンバーガーとアメリカンな感じの店が多いが、中には和食もあった。黒森峰に来る前に用意したのか、すこし雑な感じはするがドイツ料理の店もある。

こういう光景を見てみると、試合前にまほが言っていた言葉が思い浮かだされた。

『あの集団をすべてケイが統率しているんだ』

統率と一言で言ってしまうとそれまでだが、この一言の中にどれだけの労力が込められているのだろうか。

まず、お金の問題がある。

まさか赤字を出すわけにはいかないだろうから、この数えきれない屋台の支出と収入は把握していなければならないのではないだろうか。

これだけの数があると、機材の管理だって大変なはずだ。

人間関係の問題だって出てくるだろう。

中学生のときの文化祭ですら

「あっちの店が私たちの味付けを真似した」

「公用のはずの機材を誰々が独占してる」

なんて言いあって、喧嘩をするのは日常茶飯事だった。

そういう揉め事も解決しなければならぬはずだ。

おまけにケイさんが統率しているのは戦車隊のほうで、このトラック屋台の集団はおまけのようなものだ。

そしてその二つの集団の全員が楽しく、けど適度な緊張感をもって仕事をしているのは、彼女たちの働きかたを見ればわかる。

ケイさんが上手く統率している結果だろう。

凄い人だ。

私には真似できない。

心の底から思った。

同時に、さっきの試合が思い出される。

凄いはずのケイさんが率いるサンダースの戦車たちを蹴散らしていく黒森峰の戦車

隊。

人が操縦しているとは思えないような動きを見せる、まほの操る戦車。

試合の初めから終わりまで、表情も声も乱すことのなかった、まほ。

試合のときの興奮が戻ってきた。

それを冷やすため、屋台でジュースを買って、一人で頭を冷やせる場所を探した。

試合会場が原っぱの真ん中だし、人が大勢集まっている。

そんな場所があるのかと探しながらも疑わしかったが、意外とすぐ見つけることができた。

予備機なのか、観客席の脇にサンダーズの戦車が何両かならんでいる。

その周りは静かだった。

私は人目を避けるように、そこへ向かった。

そして、その人の顔を見たとき

(あれ、まほ、かな?)

と、思った。

しかし、ちがう。

よく見ると、全く似ていない。

まほではない誰かが、スカートのまま地べたに座り込み、予備機と思われるサンダー

スの戦車を見上げていた。

立ち止まって観察する。

制服はサンダースのもの。

肩くらいまで伸びたブロンドの髪が、ふわふわと揺れている。

それでやつと気づく。

ケイさんだ。

表情がイメージとかけ離れすぎてわからなかったが、たしかにケイさんだった。

私は思わず、あとずさろうとして、芝草に足を取られた。

転びこそしなかったがジューズをこぼした。

パシヤツと音がして、ケイさんと目が合った。

「あの、ごめんなさい……」

最初に口を出したのは、謝罪の言葉だった。

べつに悪いことをしたわけではなかったが、謝らなければいけない気がした。

「なんで謝るの？」

試合前にも見た、太陽のような笑顔を浮かべてケイさんが言う。

その明るさが、よけいにさっきの表情の暗さを際立たせて、よけいに申し訳なくなる。

けど、謝るのもおかしいし、逃げるわけにもいかない。

私は立ち尽くしてしまつた。

ケイさんから見たら可笑しかつただろう。

けど、ケイさんは逆に笑顔を引つ込めて、ひとつ息をついて

「あなた、まほと仲がいいのね」

と、言つた。

それから

「さつき、まほに抱きついてたの見てたわよ」

とも言つた。

あの醜態を見られていたのかと顔が赤くなつたのを感じた。

そこでケイさんは、あの明るい声で笑つた。

「アハハ！ 茅野ユウさんよね、改めて初めまして。私がサンダース大学付属高校隊長

のケイよ。よろしくね！」

何で私の名前を。

私が聞く前にケイさんが立ち上がつて、手を差し出してきた。

握手らしいと察して手を出した。

すると、ケイさんはその手をガツチリと掴まえて言つた。

「ちようどいいから、ちよつとだけ私の愚痴も聞いてくれない？」

ケイさんにうながされて、さつきケイさんが座っていたところに座る。

その隣にケイさんも座った。

目のつく範囲に私たちしかいないのと、周囲から騒がしい話し声が聞こえる。

そのせいで、何かのイベントから抜け出して仲のいい友達とサボっている、というような雰囲気になった。

もちろん、私はケイさんと話すのがはじめてなので違和感がある。

それにケイさんは自分から言っておいて、隣に座ったまま無表情に例の戦車を見上げていっただけで、なかなか話をはじめようとしなかった。

こうなると私の方から話をはじめられない。

「あの、私のこと、どうして知ってたんですか？」

ケイさんが私に向き直る。

「試合の打ち合わせのときにね、まほが言ってたの。友達に愚痴を聞いてもらったって一度話しはじめると勢いがついたのだろう。」

ケイさんはどんだん言葉を投げてきた。

「ほら、まほっていつもクールな感じで、弱音なんか吐きませんって感じでしょ？ だか

ら驚いちゃってさ。『なんていう子なの？』って問い詰めて名前は聞いてたんだよね。しかもさつき、あんな風にまほに抱き付いてたでしょ？ ただの同級生があんなこと出来るわけないから、この子が茅野ユウなんだなって」

さつきの醜態を思い出して顔が赤くなる。

恥ずかしくて逃げ出したかった。

その私の反応を愉しんでいるのか、ケイさんが笑った。

「アハハ！ ユウはシャイなのね！ あのからいのスキンシップはどんどんすればいいのよ！」

バンバンと背中を叩かれる。

すこし痛い。

そう思っていると、突然、抱きしめられた。

「ほら、悪い気はしないでしょ？」

ケイさんが問いかけてくる。

大きな胸の、柔らかい感触が私の顔を包んでいる。

たしかに悪い気はしなかった。

とてつもなく恥ずかしいことを除けば。

後輩たちが見ている前でこんなことをしたのだと思うと、余計に申し訳なくなつた。

「ケイさんー！」

「ごめんごめん」

解放された。

半分は名残惜しさを感じつつ崩れた姿勢から座り直して、もう半分の恨めしさで眉をひそめてケイさんを軽く睨む。

ケイさんは笑顔で私の視線を受け止めた。

いい笑顔だなあ、と呆れながら思った。

底抜けに明るい笑顔だ。

そのせいか『まあいいや』という気になってしまう。

この人の笑顔には、そういう力がある。

でも、ケイさんは少しすると、その笑顔を引っ込めてしまった。

笑顔が明るかっただけに、ひどく沈鬱な表情になってしまったように見えた。

その真つ暗な表情でケイさんは言った。

「……それで、本題の愚痴なだけどき」

私は身構えた。

「さっきの試合、サンダーズの負けだったじゃない？」

フラッグ車の白旗が挙がったのはサンダーズだ。

戦車道のルール上、負けたのはサンダースということになる。

「……そうですね」

「一方的な試合だったじゃない？」

さっきの試合を思い出す。

サンダース側も善戦した、ように思う。

私の隣で見ていた子も、ケイさんの立て直し方やサンダース側のいくつかの車両の動きを褒めていた。

けど、試合開始早々、まほを先鋒とした黒森峰の突進を受けると、サンダースは混乱した。

立て直したときには、二十両の戦車は十両になっていた。

黒森峰の損害はゼロだ。

それからは待ち伏せや奇襲を主な戦術にして戦っていたが、あまり効果はなかった。

サンダースのフラッグ車から白旗が挙がるころには残存車両、黒森峰十八両、サンダース三両という結果だった。

サンダースの惨敗とっていい。

「……」

「それでさ」

ケイさんが言う。

「……悔しかったなあって」

私はなんと言葉をかけていいかわからず、ただ黙っていた。

それが返って良かったらしい。

ケイさんは淡々と言葉を吐き出し続けた。

「まほってさ、小学校のときから有名だったの。戦車道の名門、西住家に天才がいるって。実際すごかった。上の学年と試合しても勝ちやうし、同学年の大会なんか、当たり前みたいに優勝してさ。ユウは知らないかもしれないけど、このときからテレビに出て、受け答えだっけしっかりしてた」

そこでケイさんは言葉を切って、大きく息を吸って、吐いて、しみじみと言った。

「カッコいいのよね。あんな風になりたいって思ったくらい」

私がこう言ってたの、まほには内緒よ、恥ずかしいから。

そう言っただけ、はにかむ。

「だからさ、サンダースの隊長に選ばれたときは嬉しかったなあ。まほと同じところに立ってたんだって。今日の練習試合が決まったときは、もう張り切っただけさ。まほに勝つんだって、いろいろ気合入れてきたんだけど……」

ケイさんの顔から笑顔が消えて、何かに耐えるように眉間にしわが集まった。

でも、それは一瞬のことでもまた笑顔が浮かぶ。

「結果は惨敗。私が隊長になれたって喜んでるときに、まほはもう一段上にいたってわけね」

そこでケイさんは立ち上がって、不意のことで驚いている私に言った。

「ユウ、ありがとね。おかげですつきりしたわ」

お礼に何かおごるわ、立てる？

促されて立ち上がる。

それを見届けて歩き出そうとしたケイさんの背中を、私は

「あの一！」

と呼び止めていた。

べつに聞かなければいけないことではなかったが、どうしても聞きたかった。

「なんで部外者の私にこんなことを？」

ケイさんの足が止まって、振り返った。

そして「もちろんサンダースの皆は私も大好きだし、頼りにもなると思ってるけど」と前置きして言った。

「隊長はね、どんな形でもいいからカッコよくないといけないの。『あんな風になりたいたい』って、そう思われるくらい」

そのとき、一人暗い校舎に残って頭を抱えていたまほと、人気のない所に来てぼーつと戦車を見上げていたケイさんの姿が重なった。

「だから試合に負けたくらいでクヨクヨしてる姿なんて見せられないんだよね」

そう言いきったあとで、またニカツと笑う。

クールで表情を変えないまほとは対照的な表情のはずなのに、その二つの表情は驚くほど似ていた。

「ケイ、ユウ、ここにいたのか」

そのあと私とケイさんが屋台を物色していると、見知った顔が声をかけてきた。

まほだ。

うしろにエリカちゃんと、サンダースの制服を着た二人の生徒がついて来ていた。

一人は長身のショートカット、もう一人は比較的背が低いのとそばかすが特徴の女の子。

「あつ、ナオミー！ アリサー！」

ケイさんが私の隣で声をあげて、手を振った。

そして二人が呆れたような顔で寄ってくると、あの太陽のような笑顔を満面に浮かべて、二人の肩を掻き抱いた。

「いきなり何するんですか、隊長！」

「アハハ！ 二人とも隊長を差し置いてどこに行つてたの？ それにまほと一緒にいるなんて、何？ 浮気？」

「ケイを探してたんだよ。どこにもいないから、もしかしたら黒森峰の隊長と話してるかとも思つて訪ねてみたら、成行きで一緒に探してもらえらることになったんだ」

「ああ、そうだったの。ごめんごめん」

サンダースの三人から楽し気な話し声が聞こえてくる。

まほに視線を移すと、いつも通りのクールな表情で、エリカちゃんと一緒に次の試合がどうと話している。

二人の隊長の表情は、あの夜とも、さっきの戦車の前とも違つていた。

いまの表情を見ただけでは、二人があんな表情をするのを想像すらできないだろう。

やっぱり、この二人は似ていた。

そして二人とも良い隊長だった。

Side 砲手3

一度、戦車に乗り、試合がはじまれば砲手の仕事は少ない。

砲塔を旋回させる。

引き金を引く。

車長の指示に従う。

それだけだ。

ただし、もつと上手くなることも仕事だと考えるようになると、試合の外での仕事が増えてくる。

反復練習を重ねて、砲の癖、射撃の感覚を体に覚え込ませることも仕事だ。

主要な戦車の構造、有名有力な選手の個性を調べて頭に叩き込んでおくことも仕事だ。

例えば今のように。

敵の戦車がソ連製重戦車IS-2。

車長がプラウダ高校のエース、ブリザードのノンナといった場合。

(IS-2の最大速度は37kmと重戦車としてはまあまあ)

(装甲は前面が120mm、側面90mm、後面60mmと防御が固い)

(ただ前面装甲のうち下部は60mmまで薄くなってるから狙い目になる)

(砲は43口径122mmと文句なしの大火力)

(私たちが乗っているティーターIの前面装甲でも抜ける)

(しかも相手は高校戦車道界で一、二を争う砲手)

(撃つ間を与えたら、こつちが撃破される)

と、これくらいのことパツと思ひ浮かんで、かつ揺れる車内で素早く砲塔を旋回させ、瞬時に砲の癖も考慮して狙いを定める。

ということができないのでは西住まほの砲手は務まらない。

「レンー！」

まほが私の名前を呼ぶ。

肩に置かれた手が『撃て』と言う。

引き金を引く。

轟音がして、車体が大きく揺れる。

揺れが収まると、IS-2が煙をあげながら白旗をあげているのが見える。

チラツとまほの顔を見る。

目が合う。

その瞬間、私は何か堪らないような気分になって視線を逸らした。

「……エリカ、IS-2は撃破した。あとは作戦通りに頼む」

少し間があったあと、後ろからそういう声が聞こえた。

操縦席からメイとユリが私を見ている。

それに苦笑いで応えて、一つ息を吐いた。

『隊長、プラウダのフラッグ車を撃破しました。試合終了です』

しばらくしてエリカから練習試合の勝利を告げる報告がくる。

横で笑顔を浮かべているあかねとハイタッチを交わして戦車を降りた。

「どうだカチューシャ、お互いせっかく静岡まで来てるんだ。明日の抽選会場にはうちのヘリで一緒に……」

「敵と一緒になんて行くわけないでしょ！ いい？ 言っておくけど、今日はうちのニーナが絶好の機会を外したから負けただけよ？」

「すいませえん！」

「あそこで運悪く外れてなかったら今日もプラウダが勝ってたんだからね！」

試合後の礼が終わったあと、まほとプラウダの隊長のカチューシャが話している。

カチューシャは相変わらずだな。

さつき謝ってたのは見覚えがないから一年生か。

なんて考えながら様子を見てみると、プラウダの列から長身の選手がこつちに歩いてきた。

ノンナだ。

「レンさん、お見事でした」

落ち着いた声でノンナが言う。

手をあげて軽く挨拶すると、ノンナは丁寧に頭を下げ返してくる。

「前回大会以来でしたね」

「そうだな……でも、なんで大会の抽選会もはじまろうって時期に練習試合を組んでくれたんだ？ そりゃ、うちとしたら前の大会の嫌なイメージを払拭したかったんだけど」

「秘密です」

「私とお前の仲なんだから、教えてくれたっていいだろ？」

彼女のことは小学校のときから知っている。

北海道の出身で私たちとは日本の正反対に住んでいるわけだが、全国大会で何度か戦う機会があったのだ。

優秀な選手だけに彼女こそ黒森峰に入学するのではと思っていたのだが、今はこの通

り、プラウダにいる。

たぶん黒森峰を倒すのを目標にしてプラウダを選んだのだろう、と勝手に想像していた。

「私と貴女の仲だからです。余計な情報を与えたら、それだけ不利になるのは知っていますから」

「なんだよ情報統制か。つまらないな」

「ええ、我がプラウダ高校では黒森峰に対しては特に嚴重な情報統制を敷いています。今はスパイが来ているようなので、それらに対しての統制でもあります……」

そう言いながらノンナは視線を頭上に向ける。

視線を追っていくと何台かのドローンが空中を浮遊していた。

ノンナがさらに観客席にも視線を向けた。

そちらにはティーポットの絵を高々と掲げた一団が見える。

その中の一人が私たちの視線に気づいたのか、お淑やかにニコリと笑った。

彼女のことも、よく知っている。

聖グロ隊長車の砲手で、隊を離れることのできない隊長に代わって敵校からの情報収集を担当している人物、アッサム。

はじめは変装してバレないように注意していたらしいが、まほの

「他校の偵察が来ても気にすることはない。むしろ見せつけてやればいい」

という隊員に向けていった言葉をどこかで聞いたらしい。

それ以来、こうして堂々と偵察行為に励んでいる姿を見かけるようになった。盗聴器か何かを仕掛けているのかもしれない。

「それより大丈夫ですか？」

「ん、何がだ？」

唐突な質問に、思わず聞き返してしまふ。

体調は悪くないし、心配されるような状態ではない。

でも、それからノンナが続けた言葉には肝が冷えた。

「まほさんと何かあったのでは？」

ジツと、こちらの腹の底まで見通そうとしているような目でノンナは言った。

思わず苦笑いしてしまう。

砲手とは、こういうものだ。

長距離射撃をする場合、発射から弾着までコンマ数秒の時間がかかるため、敵の動きを計算に入れて撃たなければならない。

そして動きを予想するには、その車両の動きを観察し、細かい動きから情報を得なければならぬ。

だから良い砲手は、すべからくこういう観察眼がある。

それだけに私は何も答えられなかった。

「カチューシャは」

黙っているとなンナが言った。

「前回大会のような勝利は望んでいません。今大会こそ、完全な黒森峰に……」

「ちよつとなンナ！　なんで敵と仲良きそうに話してるのよ！」

しかし、それを遮られてなンナは声の方に視線を移した。

まほとの話を終えたようだ。

カチューシャが機嫌悪そうになンナと足音をさせながらやってきて、なンナの肩に乗った。

「申し訳ありません、カチューシャ」

「まあ、いいわ」

なンナの肩に乗って偉そうに腕組をしたまま、カチューシャは黒森峰の隊列を見回して言った。

「あなた達は今度こそ言い訳できないほど完璧にやつつけてやるんだから！　覚悟しておきなさい！　なンナ！」

なンナは憎まれ口を叩いた隊長に「はい」と答えると、その隊長の代わりに深々と頭

を下げた。

「あつ！ ちょっとノンナ！ 何するのよ！」

慌てたカチューシャが思いつきりノンナにしがみつく。

その様子が面白くて、黒森峰に一瞬走りかけた緊張がほぐれた。

瞬間

『ああ、そう言えば』

と、ふと思いついた。

戦車に乗ってからの砲手の仕事と言えるものがもう一つある。

「レン、ちよつといいか？」

カチューシャたちを見送ったあと、まほに呼ばれて向き直った。

まほは私と目を合わせて、一瞬だけ気弱げに視線を外し、それからもう一度、私の目を見て言った。

「私とエリカが抽選会に行っている間、隊のことを任せていいか？」

「急だな。まほとエリカがいない間は休みだと思ってたぞ」

「すまない。言うのが遅れた」

まほが視線を落とす。

「まあ、任せろ。車長に何かあつたら、代理になるのが砲手だからな」

その後、まほとエリカを残して学園艦にもどった。

私たちはこのまま熊本に帰り、残ったまほとエリカは明日の抽選会のため、へりで東京に移動する。

帰ってくるのは明後日の夕方だ。

だから明日と明後日の練習の指揮するのが隊長代理の仕事ということになる。

「レンさん？ 帰らないんですか？」

解散を宣言したあとも残っていたものだから心配になったのだろう。

アカネが心配そうに声をかけてくれた。

それに「ちよつと用があるんだ」と返事をして、私は一人で隊長室に引き返した。

そこに用がある。

「失礼します」

無人の隊長室前で、一年生のころから染みついた挨拶をしてドアを開ける。

飾り気のない、黒森峰らしく几帳面に整理された部屋に足を踏み入れる。

入り口の向かいにある『隊長机』と呼ばれている机の、右下の引き出し。

そこにしまっている、各隊員の情報が書かれたファイルを取り出す。

「……相変わらず、すごいな」

情報量が多い。

隊員の氏名、出身地、生年月日、家族構成、趣味、好きな戦車などの基本的な情報。加えて、各隊員ごとに戦車道をはじめた理由、人間関係、日ごろの様子、戦車道に対する姿勢、適正ポジションに対する考察。

健康状態の推移や学業成績なんていうものまで書いてある。

例えばアカネのファイルだと

『氏名：〇〇アカネ』

『出身地：鹿児島県出水市出身』

『生年月日：20×1022』

『家族構成：祖母、父母、兄、姉、弟。祖父との思い出話をよく話している』

『趣味：バードウォッチング、とくにツルが好きなようだ』

『好きな戦車：三号戦車』

『戦車道を始めたきっかけ：小学校のときに西住まほ選手（何度か消しゴムを使った跡がある）の試合を見て憧れた』

『人間関係：誰に対しても分け隔てなく、積極的に接する傾向にある』

『レンには特になついているようで、話をしているのをよく見かける』

『同級生では逸見エリカと仲がいい』

『副隊長の西住みほとも比較的仲がいいようだ……』

『……話を聞いている限り、戦車道外のクラスメイトとも良好な関係を築いているようだ』

『日ごろの様子：非常な勉強家であり、努力も惜しまない』

『ミーティングでも鋭い意見を言う』

『レギュラーポジションを取ることを強いモチベーションにしているようだ』

『そのせいか、練習に熱が入り過ぎて体調を崩しかねないところがある。要注意……』

『……自分の立場と期待されていることをよく理解している』

『先輩には教えを乞い、同級生とは情報を交換し、後輩には自分の技術を教える、という姿勢が感じられる』

『適正ポジション：本人は車長志望だが、他の全てのポジションでも平均以上の能力がある。……』

『……今後によつては副隊長、小隊長も任せられるか』

『健康状態：5月5日すこし痩せたか』

『8月12日ふらついていたように見えたのが気になる』

『8月13日目に限がある。あまり無理をしないようにと声をかける』

『8月14日回復したのか、声に張りが戻っていた』

『1月4日インフルエンザで練習を休む……』

『学業成績：極めて悪い。学業も疎かにしないよう声をかけるも効果なし。ゲットー行きも已む無しか』

と、アカネの情報だけでもA4用紙十枚くらいに細かい字でびっしりと書いてある。誰か専門の役職の人物が書いたわけでも、先輩から受け継いだものでもない。

全てまほが手書きで書き加えたものだ。

本当に頭が下がる。

私はそれらに目を通しながら明日のための名簿を作っていく。

まほがない大会前、最後の機会に私が絶対にやらなくてはならないことがあるのだ。

「あいつ、書き過ぎだろ……もうちょつと楽しくくれたら、私も楽できたつてのに」

結局、深夜——というより明け方の——四時まで隊長室にいた。

授業が終わると、隊員たちは格納庫の前で、軍隊のような三列横隊をつくって隊長を待つ。

隊長は訓練をはじめめる前に、その横隊の前にたつて訓示を行う。

副隊長でも隊長に代わって指揮を執るときは同じことをする。

ただの隊長代理だって例外ではない。

私は通例にならって、横隊の前に立った。

みんなの視線が私に集中する。

それらの視線からは、はじめてここに立つ私が何を言いだすのかという興味がにじみ出ていた。いい傾向だ。

緊張で固くなっているのを自覚して、皆に気づかれないように小さく深呼吸して言う。

「傾注！」

これも通例にならった挨拶。

いつもなら、このあと練習の予定を説明して、最後に

『気を引き締めて行こう』

とか

『怪我には気をつけるように』

とか、手短かな言葉で締め、練習がはじまる。

けど、今日はあえて趣向を変えた。

「前回大会の直後の月刊戦車道の記事、覚えてるか？」

何を言い出すんだという視線が集まってくる。

計算通りだ。

話をつづけた。

「私とまほが出会ったのは小学一年のときだ」

「たまたま同じ戦車道のチームに入って、偶然、隣に並んでたから同じ戦車に乗せられたっていうのが出会いだった」

戸惑うような感情の揺れが見えはじめる。

私語厳禁と言いつ渡されている隊員にはめずらしく、隣同士でささやき合っている隊員の姿も見える。

「そのときの教官が凄まじい人だな」

『戦車なんて、ガーツと動かして、ドンドン撃つてればいいのよ!』

「って、こちとら何もわかんねーのに戦車に乗せられてさ」

「小学生低学年の部だから大人の教官が操縦手兼指導員として乗ってくれてたとはいえ、いきなり五両参加のデスマッチ戦をはじめさせられたんだ」

ざわめきがさらに大きくなる。

もう私語を隠す様子もなく、ほとんど全員が隣同士、周囲に話し声を飛ばしている。

「砲撃の音はスゲーし、揺れて体打ちつける」

「このとき装填手やってた井手上メイとかいう奴は泣きはじめるので、もう地獄だった」

「でも、まほってこの時から凄かったんだな」

「一人だけ落ち着いてて、井手上をなだめて、私にも指示出してきて、指導員にまで指示出してさ」

「指示に無我夢中で従ってたら、いつのまにか私たちだけ残ってた」

「まあ一応、人生で初めて戦車に乗って、初めて勝ったってことになるんだな」

「でも、このときは嬉しいよりも、戦車が怖くて仕方がなかった」

「もう戦車道なんてやめようと思った」

「けど、戦車から降りて、まほに言われたんだ」

「『高松さん、君のおかげで勝てた』って」

「このときは嬉しかったな。思い出しただけでも顔がニヤける」

「言いながら本当にニヤけてしまったのを手で隠して、みんなの反応をうかがう。

さつきより心なしかざわめきが小さくなっている。

私の話に集中し始めている様だった。

若干一名、こちらを睨んでいるが気にしないことにする。

「でも、もつと嬉しかったのは中学に上がる前だな」

「私の実家って貧乏でさ、中学に上がったら戦車道やめるはずだったんだよ」

「特待生とかで学費免除になるならともかく、中学でまで戦車道なんてさせられないっ

て」

「戦車道の特待生枠なんてほとんどないだろ？」

「黒森峰の中等部ならいくつかあったんだけど、残念ながら私は擦りもしてなかった」

「だから小学校のときの最後の大会のとき、戦車の中で、ぼそつと言ったんだ」

「『戦車に乗るのも、これが最後か』って」

「そのときはそれだけで終わったんだけど、大会が終わってから西住師範に呼び出された」

「行くと師範がいて、まほが横で号泣してんだよ」

「何事だと思ったね」

「で、師範に言われた」

「『あなた、戦車道をやめるって本当なの？』って」

「まほが気になってたけど、師範を無視できるわけがないから『はい、お金がないので仕方がありません』って答えた」

「そう言うのと、師範が言った。『お金が必要でなければ続けるのね』」

「で、私。『ええ、そうしたいですけど』」

「師範がまた言った。『私なら黒森峰中等部の特待生枠を一つ増やしてもらうこともできます。貴方を推薦することもできる』」

「これまた驚いた」

「あの曲がったことが大嫌いな師範が、政治工作、裏工作をするって言うてんだからさ」
「もう驚きすぎて、なんて言うていいかわからなかった」

「師範がまた言った。『跡取りが』って」

「『本当なら、こんなことは口に出すことすら恥ずべき事です。でも、そこに座っている西住家の跡取りが、そうしてくれないと戦車道をやめると言うて聞かないので仕方なく言うています。どうしますか?』って」

「……まあ、この後どうなったのかは私がここにいるからわかるだろう」
「で、さ」

「こんなことされると、人間って……惚れちやうんだよな」

「『ああ、俺、こいつのために生きてたんだな』って」

一つ息をついて、隊員を見回す。

もう、私語をしているやつは一人もいなかった。

どうしてこんな話をしているのか、みんな理解できたようだった。

みんなまほに対して、大なり小なり私と同一ような感情を持っているのだ。

ここまで話して、理解できないはずはない。

「最初の質問に戻るぞ」

「前回大会の直後の月刊戦車道の記事、覚えてるか？」

忘れてはいるはずがない。

その記事では、私たちの隊長が口汚く罵られていた。

曰く、栄光ある黒森峰女学園の歴史に泥を塗った無能。

曰く、自分の妹の行動すら統率しきれないのは期待外れ。

曰く、戦車道の名門たる西住家も彼女の代で終わるだろう。

まほのことをよく知らない奴と、まほの足を引っ張りたい奴が書いた、でたらめ記事だ。

けど、まほを勝たせてあげられなかった私たちには、何も言い返すことが出来なかったのだ。

悔しかった。

その感情はこの場の全員が共有しているはずだった。

「あの記事を読んでから、ずっと考えてた。どうしたら、まほの汚名を返上してやれるのかって。で、最近思いついた」

言葉を切つて、隊員たちを見回す。

みんなの視線から期待を感じる。

それを確認して、口を開く。

「まほを二十連覇の初代隊長にしよう」

「九連覇で終わらせた隊長じゃなくて、二十連覇をはじめた隊長にしてやろう」

「そうすれば十連覇を逃したことなんて、みんな忘れる」

「むしろ、このときの口惜しさが二十連覇につながったんだって、勝手に綺麗な解釈してくれるようになる」

二十連覇というのはすこし吹いた。

けど、効果はあつたようだ。

みんなの目に闘志が燃えはじめたのがわかる。

私はさつきより声を張った。

「そのためには、まず次の大会だ！ 次の大会で圧勝すれば、黒森峰の入学希望者は増える！ その次も優勝すれば、もっと増える！ それを続けてれば、自然とチームは強くなるし、二十連覇も夢物語じゃなくなるはずだ！」

隊員たちが、また隣同士、近くの仲間同士で口々に話しはじめる。

でも、それは演説を始めた当初のようなものではない。

互いに励まし合い、興奮を分かち合うための会話に変わっていた。

「やろう！」

まず、声をあげたのはユリだった。

それから

「やろう！」

「やりましょう！」

と、一気に広がって、ついに全員が

「隊長を二十連覇の初代隊長に！」

と唱和しはじめた。

成功だ。

これだけ士気が上がったら、黒森峰の実力から考えて負けることはない。

すこしは役に立てたはずだ。

これなら私たちが頼ってくれるはずだ。

そう思えた。

けど。

「傾注！」

翌日の夕方。

練習がはじまる前に、まほとエリカは帰ってきた。

予定通りの時間だ。

私たちは隊長を迎えるため格納庫前に整列していた。

「留守のあいだ、ご苦労だった」

三列横隊の前に立って、まほが言った。

そのとき私は、そこから言いようのない違和感を覚えた。

強いて言うなら、前回大会の敗戦からみほが黒森峰を去ってしまったとき。

あのとき感じていた「それ」と非常によく似ていた。

「抽選の結果だが、第一回戦の相手は知波単学園。知つての通り、隊員の練度と勇敢さに定評のあるチームだ」

「それと四強のうち聖グロリアーナが同一ブロック」

「プラウダとサンダースは別ブロックだ」

「おそらく、どちらかが決勝の相手になるだろう」

表面上、何でもないように見える。

でも何となく、いつも以上に口調が固いようだった。

こころなしか早口になっているようでもある。

さらに付け加えると、隣に立っているエリカはあからさまに動揺していた。

「サンダースは別ブロック」

と言ったとき、まほの顔色を窺うように視線が動いた。

「細かい組み合わせは明日トーナメント表を作って配布する」

「それと今大会の各校への対策、作戦の立案、試合での指揮は主としてエリカにやつてもらおうと思っている。エリカ、頼むぞ」

「え、あ……は、はい！」

「よし、それでは本日の練習だが、いつもどおり基礎体力訓練のあと、各車両に分かれて射撃訓練を行い、最後に三年生チーム対一、二年生チームの紅白戦を行う」

「……大会に近い。みんな気負い過ぎて怪我をしないように頼む」

「では、練習開始！」

ぴしつと声のそろった返事をして、みんなは移動を開始した。

基礎体力訓練は、まず軽いランニングからはじまる。

みんなはスタート位置に急ぐ。

そんな中、私だけ逆行して、まほに歩み寄った。

まほは私をじつと見ていた。

「なあ、何かあったのか？」

正面に立つと、まほの視線を受け止めて言った。

「何も無い。おそらく何も無く終わるはずだ」

まほは無表情に答えた。

他の誰かなら何も情報を読み取れないだろうという完璧なポーカーフェイスだった。でも、私にはわかる。

まほは何かを隠している。

エリカが動揺を隠しきれなくなるほど、重要な何かを。

「おそろくつてどういいうことだ?」

言葉が震えた。

たしかに隊長なら統率上の問題で隊員に隠すべき情報はあろうだろう。わかっている。

でも、それは私にも必要なことなのか。

「九割九分、なんの問題もない。問題も見つからずに終わる、ということだ」
「その一分の確率で起こる問題って何なんだ!?!」

そういうことが聞きたいんじゃない。

一步、二歩、考えるより先に体が動いた。

両手がまほの襟首をつかんでいた。

でも、まほが何かに耐えるように眉間にしわを集めているのを見ると、急に力が抜けてしまった。

「すまん……」

手を離す。

いたたまれなくて、それだけ言って踵を返した。

「……一回戦の日程がすべて終了したら言う。たぶんそのときには、問題は終わっているんだ」

背中越しにまほがそう言ったのが聞こえたが、振り返る気にはなれなかった。

大会当日、一回戦。

黒森峰は勝った。

勝って、試合後の礼も終わったあと、観客席が妙なざわめきを見せた。

どうやらスクリーンに気になる情報が表示されたようだった。

つられて私も見た。

スクリーンはサンダース隊長のケイが、副隊長の肩を慰めるようにポンポンと叩いている映像を流していた。

『サンダース大付属一回戦敗退』

テロップでそう表示されている。

そういうことか、と半分は納得した。

優勝候補の一角が一回戦で、しかも無名校に敗れたのだ。衝撃ではあるだろう。

とはいえ、四強が格下の相手に敗れるのも珍しいことではない。

『戦車道にまぐれなし』

とは西住師範の言葉だが、実際問題として運の要素は関わってくる。

それは観客も理解しているから、これほど空気が揺れるほど騒ぐことはないはずだった。

しばらくスクリーンを見てみると、映像が切り替わる。

『大洗女子隊長、西住みほ』

テロップに新しく、そう表示された。

Side クラスメイト4

抽選会のおきから、まほの様子がおかしいのは感じていた。

一回戦を突破してから、さらに顕著になった。

あの夜ほどではないが、それに近い物がある。

何とかしてなくてはと思って

「ねえ、まほ？ 何かあったの？」

と声をかけてみても、はぐらかされてしまう。

どうしたらいいだろう。

そう思っていると、声をかけられた。

「茅野さん」

振り向くと、初めて話すクラスメイトがそこにいた。

「井手上、さん？」

彼女はうなずくと

「昼休み、屋上に来て」

とだけ言い残して行ってしまった。

井手上メイさんは、クラスでは目立たない存在だ。

物静かで喋らないし、いつもまほか本庄ユリさんと一緒にいる。

その二人はいつも戦車道の関係者に囲まれているから、ただのクラスメイトは話しかけられないのだ。

声を聞く機会といえ、授業で先生に当てられたときくらいだ。

そのときだつて必要最小限のことしか喋らない。

だから彼女がどんな声だったか、咄嗟に思い出せるクラスメイトは少ないのではないだろうか。

そんな彼女だけど、戦車の操縦手として三本の指に入る実力者だというのは有名だった。

以前、月刊戦車道で

『操縦手のトップスリーを選ぶ』

という記事を見たことがある。

三本のうち、二本は若干の変動があつたが、彼女の名前だけは全員から挙げられていた。

『運転技術は間違いなく上位』

『細かいミスがない』

『車長との意思疎通の早さはテレパシーを使っているとしか思えない』

というような賛辞がコメンテーターたちから寄せられていた。

そのテレパシーに関連して、こんな逸話を友達が教えてくれた。

ある時の月間戦車道の記事に、まほとメイさんのインタビュー記事が載った。

まほの方は中学大会の優勝インタビュー。

メイさんは『若き天才操縦手に聞く』と題うったインタビュー。

それぞれ別の記事だ。

ついでに言っておくと、この二つのインタビューは同じ日の同じ時間に、一方は熊本、

一方は東京でされたということだ。

まず、まほの記事。

「そう言えば西住選手のパンターは特に動きが機敏ですが、やはり操縦手の井手上メイ選手の力によるものが大きいということでしょうか」

「そうです、メイは私にとって最上の操縦手だと思っています」

「最上の、ですか。では西住さんは戦車道の本場であるドイツとの国際試合にも参加しているわけですが、そのドイツ人操縦手たちよりも本条選手の方がテクニクが上だと考えているんですね」

「いえ、技巧だけで言えば、ドイツにはメイよりも高い選手もいました」

「テクニクよりも操縦手には重要なものがる、と」

「はい、彼女は私が考えていることを言葉にしなくても理解してくれます。これはどんなテクニクよりも車長としてありがたいことです」

次にメイさんの記事。

「本条選手の操縦する戦車は他と比べて格段に動きが機敏ですが、やはり車長の西住選手の手力によるものもあるんですか？」

「そう思う。まほは私にとって一番の車長」

「ほう、一番のとは大きく出ましたね。とすると、井手上選手は西住選手を世界一のレベルにあるドイツリーグの車長よりも優秀な車長だと思つていらつしやるわけですね」

「ちがう。まほより優秀な車長なら何人かいた」

「……というと？」

「まほは私が考えていることを何も言わなくても理解してくれる。これはたぶん、どんなことよりも嬉しいこと」

『これ片方、インタビュウしてないだろ』

あまりに似通った内容に疑惑を込めた苦情が月刊戦車道の編集部に寄せられた。

もちろんインタビュウは実際に行われていて、記事もインタビュウの内容を忠実に再

現したものだ。

翌月の記事で、まほとメイさんの「たしかに二人ともインタビューされた」という言葉が載ったそうだ。

昼休み、私は井手上さんの言ったとおり屋上にきた。

メイさんは私よりも先に来ていて、ベンチに座って私を見ていた。

「みほが大会に出てる」

メイさんがいきなり言ったので、私は混乱してしまった。

みほとは誰だ。

まほの妹だ。

大会と言えば、戦車道の大会だろう。

でも、みほちゃんとは転校するときに戦車道をやめたはずだった。

「……み、みほちゃんって戦車やめたんじゃないんですか？ そのみほちゃんが大会に出てるんですか？」

しばらくしたあと、やっとこれだけ言った。

メイさんがさらに言った。

「私もわからない。みほがいる大洗女子にも問い合わせたけど、生徒会が何も答えない。

『隊長に余計な負担をかけないため』と、言ってた」

考えがまとまらない。

まほから聞いたところによると、みほちゃんが転校するにあたって、西住流戦車道の師範でもあるお母さんとの間で『もう戦車道はしない』という約束をしているはずだ。

そのお母さんに話を通していないのだとしたら、みほちゃんはお母さんとの約束を破ったことになる。

私が黙って考え込んでいると、メイさんは考えを補足してくれた。

「西住師範は、みほが戦車道を再開したことは知らないみたい」

となると、みほちゃんが話を通していないことは確定だ。

同時に、まほがそれを黙っているということでもあった。

「それって、まずいんじゃない……」

メイさんはうなずいた。

これでやっと、まほの様子がおかしかった理由がわかった気がした。

まほがみほちゃんのことを大事に思っているのは話の端々から伝わってきた。

一緒に遊びに行つたとき、小さい頃にみほちゃんと戦車に乗つた思い出を話してくれたからだ。

みほちゃんが戦車道をやめると言ったことで、まほがどれだけ傷ついたのか。

それは『あの夜』のことを思い出すだけで簡単に想像できる。『情けないが、受け入れるのに時間がかかった』

とも言っていた。

みほちゃんの場合は、お母さんだけでなく、そういう苦しみを乗り越えてきたまほを裏切ることもあった。

わからないのはメイさんがどうしてそんな話を私にしたのかだ。

けどメイさんは、これも聞くより先に説明してくれた。

「まほは戦車道の家元の娘で、黒森峰の隊長だつていう自覚が強い。自分は周りから頼られる人間じゃないとダメだと思ってる。人には、とくに戦車道の関係者には頼っちゃいけないと思ってる。だから、茅野さんしかいない」

メイさんの言うように、まほには『カッコつけ』たがる傾向がある。

普通のように見栄からくるのではなくて、周りからさせられている『カッコつけ』だ。それだけに頑固な、自分が追い詰められているのに誰にも頼れないほどの『カッコつけ』だった。

そこまではメイさんの言っていることは賛成だった。

ただ、最後の言葉には賛成できなかった。

「でも、私にできることなんか……」

こう言ったのは、面倒くさいことから逃げようとしたわけではなかった。単に私の現状を説明したつもりだった。

だって、何とかしようとは何度も話しかけて、どうしようもなく途方に暮れていたところだったのだから。

私にできることなんかない。

それこそ、まほとずっと一緒にいたメイさんたちがするべきことなんじゃないの。

そう言おうとした。

けど、メイさんのすぎるような目を見ると、言えなかった。

本当は部外者の私に頼りたくはなかったのだろう。

メイさんも何とかしようとして、私と同じようにどうにもできなくて、最後の手段として私を頼ってきているのだ。

「まあ……ちよつと話してみるけど」

そう言った瞬間、メイさんの顔にパツと明るくなった。

私の手を取って

「いつか、このお礼は絶対にする」

と言った。

安請負した罪悪感で、メイさんの顔を見ていられなくなる。

自信がなかった。

「ねえ、まほ？ 次の相手の継続高校って、どういう学校なの？」

次の日、どう切り出しているかすらわからなかった私は、そんなふうには話をふった。

「そうだな……」

まほは唐突に振られた話題を、不自然に思う様子もなく答えてくれた。

「フィンランドの影響が強い学校で、学園艦は主に寒冷な海を航行しているようだ。戦車道に関しては、総じて操縦手の技術が抜きんでている。雪原地帯での戦いには慣れているから、そういう場所が会場になったら一層の注意がいるだろう。あと……」

「あと？」

「隊長のミカは変わった奴ではあるが、優秀だ。前に練習試合をしたときも苦戦させられたし、一回戦の作戦も見事だった。なにより車長としての能力が高い。一騎打ちになつたら危ないかもしれない」

「へ、へえ、そうなんだ……」

結局、なにも言えないまま、次の試合が近づいてきた。

Side ライバル1

継続高校の学園艦上で、二人の少女が話し合っている。

「なあアキ？」

「なに、ミツコ？」

「今日のミカって、何だかおかしくなかった？ 熱くなってるっていうかさ」

「言われてみると、そうかも。やっぱり西住まほと戦うっていうと、ミカでも燃えるのかな？」

「燃えてるっていうか、本気って感じ？ あんな作戦聞いたことないし」

そこへ二人にとつて、馴染み深い音楽が聞こえてきた。

フィンランドの弦楽器。

カンテレの音色だ。

「本人に聞いてみよつか？」

「そうだな。どうせはぐらかされるけど」

「アハハ、そうかもね」

二人が行くと、予想通りの人物が彼女たちの愛車BT-42の砲塔の上に腰かけてい

た。

目をつむって、珍しく集中して考え事をしているようだった。

声をかけていいのだろうか。

二人は迷った。

こんな表情は初めて見る。

彼女たちの知る隊長は、いつも深そうで全然深くもないセリフで周囲を煙に巻くちらんぼらんだ。

そうでなければ、ただでさえ少ない食料を変な理屈で独り占めしようとする意地汚い変人だ。

迷っていると、カンテレの音が止んだ。

BT-42の上から宝石のように澄んだ、この世の全てを見通すような——彼女たちが知る限り、実はそうでもない——目が二人を見つめていた。

「ズルい作戦だ……そう思うかい？」

これまた珍しく、本当に心を見透かしたように隊長が言った。

二人は顔を見合せて、それからうなずいた。

『勝てばいいってもんじゃない』って、前に言ってたじゃん。あれも適当に言っただけなの？』

「『勝ち敗けて、そんなに大事なことかな?』ってのも言つてたぞ」
隊長は答える。

「いいや。確かに勝てばいいつてもんじやないし、勝敗が大事とは思わない。けど、勝つた方がいい時もあれば、負けた方がいい時もある。それだけさ」

もう一度、二人は顔を見合わせた。

「ミカ……また適当なこと言つてないか?」

隊長はどちらともつかない微笑を浮かべて言つた。

「さあ、どうだろうね?」

「もう! ミカつたらそればかりなんだから! 行こ、ミッコ!」

二人が去つて行く。

それを戦車の上から見送りながら、隊長は誰にともなく言つた。

「勝つて大切な物を守れるときもあれば、勝つて失うこともある」

「負けて失うときもあれば、負けたからこそ守れることもある」

「立ち向かつて守れることもあれば、逃げて守れることもある」

「今のキミは、負けて逃げた方が大切な物を守れる」

「私はそう思うんだけど、実際はどうなんだろうね?」

「西住さん」

カンテレの優しい音色が、再び聞こえだした。

Side 砲手4

継続高校との第二回戦は、はじまる前から私たちに有利に展開した。

試合場所が砂漠地帯に決まったのだ。

継続の得意な雪原地帯でないだけでもありがたいのに、遮蔽物のない砂漠での戦いは黒森峰の得意とするところだ。

気温も高さも寒冷地に慣れた継続の足枷になると予想できた。

実際、試合の序盤。

継続の戦車はオバーヒートを起こして、全車十両のうち二両が戦線を離れた。

私たちはそこを突いて、さらに二両を撃破した。

中盤、継続が会場に慣れてきたこともあって反撃を食らい、二両を失った。

だが、序盤で有利な状況を作っていたこともあって、指揮を執るエリカも落ち着いていた。

隊形を乱すこともなく戦果を拡大。

継続の戦車を次々に撃破して、残るは隊長ミカのフラッグ車一両のみ、黒森峰の戦力は八両、という状況まで追い込んだ。

そして今。

黒森峰フラッグ車兼隊長車の乗員たる私たちは、高台の安全地帯で戦車から降り、エリカが指揮する黒森峰がミカの戦車を包囲していくのを見物している余裕すらあった。どう見ても試合は終盤にさしかかっていた。

「さすがはミカ。粘るな」

私がそう言うと、まほが反応した。

「そうだな。乗員の技量も高いようだ。この状況でも包囲されないように巧く立ちまわっている」

双眼鏡をのぞいて継続のフラッグ車BT-42を見てみると、曲芸じみた動きで黒森峰の攻撃をかわしている。

それも砲弾を避けることに精一杯という様子でもなく、包囲がうすい所をスルリスルリと抜けていく。

まだ戦場全体を見渡す余裕があるのだ。

エリカの包囲が下手というわけではない。

基本的に忠実で理にかなってはいいる。

しかしミカを相手取ると役不足という感が否めなかった。

精神的に余裕がなくなってもいるようでもあった。

無線から聞こえる声から苛立ちが混じりだしていた。

「でも時間の問題だ。たしかに凄いが七両も抜いてこつちに來れるほど集中力が続かないだろ。なあ、メイ？」

私の問いかけにメイはうなずいた。

「そう思う。あれだけの操縦をしていけば、それこそ長くは続かないはず。オーバーヒートの懸念もある」

そんなとき

「何のつもり……!」

というエリカの怒りすら感じる声が聞こえた。

ほとんど同時に、今まで黙って無線機の調整をしていたユリが叫んだ。

「まほさん! あれ!」

ユリが指さした、ミカの車両に視線を戻す。

すると、驚くような光景が目に飛び込んできた。

ミカがキューポラから身を乗り出すどころか、キューポラに座るようにして体をさらけ出していたのだ。

いつも持ち歩いているカンテレとかいう楽器を膝のうえに乗せているのも見えた。

ミカと目が合った気がした。

ニコリと笑って、音楽家が演奏の前に聴衆に対してするように、かぶっているチュウリップハットを持ち上げて軽く礼をしてきた。

うつすらと場違いな音色が響きだす。

「サツキヤルヴェン・ポルツカ……」

まほがつぶやいた。

前に試合をしたときにも聞いたことがあった。

ミカが手慰みに引いていることの多い曲だ。

なんでこんなときに演奏しだすのか。

その意図は明白だ。

「パンター一号車、二号車！　BTを黙らせなさい！」

案の定、頭に血が上ってしまったらしいエリカが指示を出した。

陣形が乱れる。

たちまち二両のパンターが撃破された。

その間、ミカはキューポラに腰かけたまま、微笑みすら浮かべてカンテレを弾きなら

していた。

乱れないカンテレの音色がこう言っていた。

『西住さん、あなた以外だと私のBT-42は撃破できないよ』

もちろんそんなはずはない。

メイとも話した通り、人の集中力には限りがある。

それまで持久戦を強ければ誰でも撃破できるのは冷静になればわかることだ。

ただ、誰よりも責任感が強く、常勝黒森峰の復活という周囲からの要求と、西住流の名を背負っているまほにとつて、この挑発はどんな戦術よりも効果的な誘いなのは間違いないかった。

王者黒森峰の戦術でも、西住流の説くところでも、挑んでくる相手に背中を見せるのはありえないのだから。

「まほー！」

気付くと、まほに呼びかけていた。

「相手の作戦に乗ることはない！ このまま持久戦に持ち込めば勝てるんだから、そうするのが隊長の責任だろ！」

一騎打ちでも勝つ自信はある。

だけど、勝負は時の運だ。

前回大会のような急な天候の変化や、この試合で起きた継続のオーバーヒートのような予期せぬマシントラブルの可能性は、いつ、どんな時でも残されている。

実力は関係ない。

にも関わらず、負けたら隊長は責められるのだ。

去年のバツシングも酷かったが「十連覇のプレッシャーがあつたのだ」という擁護があるにはあつた。

でも、もし負けたら今回はそれすら望めない。

そんな危ない橋を渡って欲しくなかつた。

でも、まほは私の言葉に答えずに

「レン、私のワガママに付き合ってくれないか」

と、静かに言った。

卑怯だ、と罵倒したくなつた。

そんなことを言われたら何も言えなくなる。

黙っている、まほは「ありがとう」と言つて、首元の無線機に手を当てた。

「エリカ、みんなを下がらせてくれ。私が出る」

「いえ！ 隊長の手を煩わせるほどでは……！」

「二度指揮を任せたエリカの顔を潰すような行為だ、悪いとは思っている。だが、ミカの挑発は西住流の後継者に対してのものだ」

「で、でも」

「すまないがワガママを聞いてくれ」

BT-42の正面にやってくると、ミカはさすがに演奏を中断して、体を車内に入れた。

頭を出しているのは相変わらずだが目つきが違っている。

本気だ、というのには伝わってきた。

私は深く息を吸って、吐き出した。

相手の情報を頭の中で整理する。

(フィンランド製の快速戦車BT-42)

(最大速度は53km、履帯を外すと73kmまで上がる)

(が、砂漠で履帯なし走行はキツイだろうから考える必要はない)

(装甲は最大でも20mm、私たちのティーガーならどこでも撃ち抜ける)

(主砲の装甲貫通力は大したことないが、HEAT弾なら100mmの装甲が抜かれる)

(ただ、砲弾と弾薬が分離式だから装填に時間がかかる)

(車長はミカ、何をしてくるかわからんから慎重に)

(操縦手は極めて優秀、できれば停止して撃ちたいところだが、ミカを相手に止まるのは危険だ)

(行進間射撃で当てなきゃならない)

「よし、行けるぞ」

考えがまとまって、まほに言う。

まほは無言でうなずいてメイを見た。

メイが操縦席でクラッチを入れる音がした。

ユリとアカネが「よし！」と、自分の頬を叩いて気合を入れた。

「パンツアーフォー！」

エンジン音が大きくなって、ティーガーが動き出した。

同時に相手のBT-42も動きはじめる。

私の照準が敵を捕えた。

「レンー！」

引き金を引く。

その瞬間にBT-42は急停止する。

砲弾は装甲を掠めて地面に刺さった。

同時、敵が放った砲弾もティーガーの足元で爆発して、砂を巻き上げた。

爆風による、疑似的な砂嵐。

敵の姿が見えなくなる。

「メイー！」

体が大きく揺れる。

メイが敵に狙わせないように、ジグザグに走行をはじめたからだ。少して敵の砲撃音がした。

掠ったのか、甲高い音が車内に響いた。

「四時方向だ！」

まほの指示に従って、砲塔を旋回させる。

ティーガーが砂嵐から出た。

敵の姿が見える。

砲塔を向けたところから、そう遠くない場所にいた。

砲塔を調整し、再び照準に捕える。

「撃てー！」

引き金を引く。

轟音がして、車体が大きく揺れる。

揺れが収まると、BT-42が白旗をあげているのが見える。

チラツとまほの顔を見る。

目が合う。

私は、ふうツと息を吐いて、まほに向けて親指を立てた。

「やあ、西住さん」

試合後、黒森峰の生徒が居並ぶなかにミカが飄々とした態度で現れた。

一瞬、緊張が走るが「あんな手を使って悪かったね」と、ミカが開口一番で謝罪したからか、雰囲気が緩んだ。

まほもそれに

「いや、敵に弱点があるなら、そこを突くのは当然だ」

と応じたから、一触即発の危機は去った。

でも、どうして敵意を向けられるとわかっていて、わざわざやってきたのか。

疑いの視線を向けていると、ミカは言った。

「ときに西住さん、妹さんのことはどう考えているのかな？」

まほの表情が硬くなる。

ミカも気づいたはずだが、気にした様子もなく続けて言った。

「プラウダを当てにしているのかもしれないけれど、強く居続けるのは難しいことさ。君が一番よくわかってるんじゃないかな」

「……」

「まあ、覚悟はしておくべきだと思うよ。お節介だったかな？」

「いや、忠告ありがとう。覚悟しておこう」

まほは珍しく、相手の反応を見ることがもなく、踵を返した。

「まほ……」

「試合は終わった。学園艦へ帰ろう」

ほどなくして大洗女子の情報が届く。

みほはアンツイオ高校を破って、準決勝進出を決めたらしい。

Side ライバル2

「こんな格言を知ってる？」

『目的は手段を正当化する』

紅茶の香り漂う園。

そこで紅茶を口に運びながら、少女はテーブルを共にする二人に言った。

唐突にも思える言葉。

しかし隣に座っている少女は慣れた様子で継ぐ。

『「何か」が目的を正当化する限りは』と続く、ソ連の政治家レフ・トロツキーの言葉
ね」

はあ、いつもはオレンジペコの役割なのだけど。

そう呆れたように言いつつ、彼女はパソコンに落としていた視線を上げて、少女に問いかけた。

「それで、この作戦に「何か」はあるの？」

その視線には少しばかり非難の色が見える。

しかし、先ほどの少女は自信に満ちた優雅な笑みと共に、こう答えた。

「西住まほに勝ちたい。それ以外に『何か』が必要かしら？」

隣の少女は、それで納得したようだった。

「……なるほどね」

そう言うと、再びパソコンに視線を落とした。

その画面には『G I 6 に対する指示書』と表示されている。

G I 6 とは、聖グロリアーナ女子学園が誇る諜報機関だ。

この機関の諜報力、情報力は戦車道を行っている全ての高校で最高とも言われている。

この機関の力がある故に、強力な戦車をもたない聖グロが長年、四強の一角に居座れるのだ、とも。

そして少女がE n t e r キーを押しさえすれば、この指示書がG I 6 に届く。

指示書が届くなり『黒森峰女子学園』に潜入している諜報員が動き出すことになっている。

「子供の頃からの、あなたの夢ですものね」

少女がE n t e r キーを押した。

間髪入れずに既読の通知がつく。

これで諜報員は仕事を果たすだろう。

キーを押した後、少女はハアと息をついた。

彼女は自分の隣に座っている少女が、それにどれだけの物をつぎ込んできたか知っていた。

その彼女がやるといっている。

なら、砲手である自分は協力しなければならぬだろう。

もう一度、彼女は「ハア」と溜め息とも何ともつかない長い息を吐く。

それを見て口火を開いた少女は微笑んだ。

視線だけで「ありがとう」と礼を言った。

「はあ」という溜め息が、「いいわ」と返事する。

それにもう一度礼を言って、視線をテーブルを共にする三人目に向けた。

「加えて、友人の学校がなくなろうとしているのよ？ それを守ろうとしている友人が『責任は負うから協力してほしい』とまで頼み込んできている。『何か』が必要だとしても、これで十分すぎるくらいだと思わない？ ……ね？ 角谷さん？」

最後の少女はツイントールを揺らして、悪戯っぽくニツと笑った。

Side クラスメイト5

「大洗女子学園は大会に優勝しないと廃校になる」

準決勝を二日後に控えた日だ。

どこからか、そんな噂が聞こえてきた。

噂は瞬く間に広がって学校中の話題になった。

特に、みほちゃんと一緒だった二年生だ。

噂の真相を確かめようと、まほのいるこの教室まで押しかけて来た。

「隊長！ 大洗のことは本当なんですか！」

先頭に立って入ってきた子が詰問するような口調で言った。

赤星小梅さんという、私が戦車道を見学するときに話した感じでは「穏やかで大人し

い子」という印象の子だった。

その大人しいはずの彼女ですら憤っている。

他の生徒はもつと興奮していた。

口々に

「みほはどうなるんですか!？」

「噂は本当なんですか!？」

と、不安を口にした。

それに対してまほは

「すまない、目下確認中だ」

と答えている。

もちろん、それで収まるわけもない。

二年生たちの中には

「隊長は、みほが大会に出ていることを隠していたんじゃないですか!？」

とまで言う子もいた。

ユリさんとメイさんをはじめとした他の三年生が間に入っても収まらなかつた。

隣のクラスから高松レンさんと、二年生の代表でもある副隊長の逸見エリカちゃんが

やってきて、やつと落ち着きを取り戻した。

「取り乱して、すみませんでした」

次の授業が始まる頃には、赤星さんたちは謝って帰っていった。

が、納得したわけではないようだった。

まずいと思った。

いつの間にか戦車道の履修生はみんな集まっていて、一連のやり取りを見ていた。

動揺しているのは二年生だけではない。

一年生たちも不安げな顔をしている。

三年生の中にも何か言いたげに、まほを見ている人がいた。

チームの運営とか難しいことはわからなくても、今の状況が悪いことくらいはわかる。

「茅野さん……」

一日の授業も終わりに近づいて、まほの周りも少し落ちついてきたとき。

メイさんが縋るような目で私を呼んだ。

自信はなかった。

けれど、幸いと言っていいのか。

こういう時、まほがどこで何をするのかだけは知っていた。

その夜。

私は寮に帰ってから、もう一度学校に戻ってきた。

校門が開いている。

暗い校舎を進んで行くと、一つだけ明かりがついた教室がある。

覗いてみると、やはり一人で頭を抱えていた。

一つ深呼吸して、足を踏み出した。

何を話したらいいかはわからないけど、とりあえず何でもいいから話そう。

そんな、やぶれかぶれな気持ちだった。

「なにしてるの？」

声をかけると、肩が跳ねる。

そして悪戯がバレた子供のような速さで振り返る。

まほだ。

「ユウ……」

「ハイ、座るよ」

まほの隣の机に腰を下ろす。

メイさんの席だ。

彼女は今日一日ずっとここにいて、まほと下級生の間に立っていた。

まほに聞いた。

「大洗女子のことって、本当なの？」

まほは一瞬だけ視線を落としてから、平静な口調で答えた。

「おそろく本当のことだ。みほが戦車道を再開していた理由も納得できる」

「でも、いきなりこんな噂が流れてくるなんて、おかしいと思わない？ 誰かが意図的に

情報を流したみたいなき。そう考えると、やっぱり適当な情報ってこともあるんじゃないの？」

まほは私の考えを「いや」と否定した。

「噂が広がる速さを考えれば優秀な諜報員のいる聖グロしか考えられない。そしてダージリンは確認すればバレるような無駄な嘘はつかない。本当のことだろう」

それを聞くと、私の胸の中で何かがぐつぐつと煮えたぎった。

「どうして、そんなことをするの？」

「私たちの動揺を誘うためだろう。実際、効果的な手だった。さすがはダージリンだ」

「そんなのって……」

「卑怯ではない。敵に弱点があるなら、そこを突くのは当然だ」

まほがそう言ったけど、収まらなかった。

収まりはしなかったけど、私がしゃべることにはまほが辛そうな表情をするのに気付くと、それ以上は言えなかった。

誰よりも文句を言いたいはずの本人が黙って耐えている。

なのに、部外者の私が文句を言っているわけにはいかなかった。

「まほ……」

『撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し、鉄の掟、鋼の心』それが西住流戦車道

なら『どんなときにも仲間を見捨てない』のも『どんな手を使っても勝利をつかみ取る』のも戦車道だ。ルールに則る以上、そこに貴賤はない」

私が名前を呼ぶと、まほはニコツと笑って、そう言った。

一目で作り物だとわかるほど、ぎこちない笑顔だった。

自分が情けなくなった。

励ましにきたつもりが、逆になだめられている。

「それにダーズリンより卑怯なのは私だ。昼はメイとユリがみんなを宥めてくれるの、いいことに後ろで黙っていただけだし、今もレンとエリカがみんなを集めて士気の立て直しを図っているのに、私だけこんなところに隠れている」

「そんなこと……いー」

ない。

そう言おうとしたとき、まほは珍しく私の言葉を遮った。

「たしかに言い訳をすることもできる。私が行つても隊員が言いたいことを言えなくなるだけとか、後ろで大きく構えているのが隊長の仕事だとか、いくらでも言える」

「だが、例えばダーズリンなら政治的に立ち回って、こんな状況に追い込ませはしなかっただろう」

「例えばケイなら彼女自身が一言謝ること場で場を収拾できただろう」

「安齋なら妹が転校するようなことにはさせなかつただろう」

「カチューシャなら多少は強引にでもみんなをまとめ上げただろう」

「ミカはよくわからないが、アイツがこんなことで追い込まれるところは想像できない。きつとうまくやるんだろう」

まほが目をつぶって、深く息を吐く。

「そう言える以上、言い訳は通用しない。私は卑怯者で、彼女たちが対応できる事態に対応できない無能だ」

何か言わなくてはいけない。

焦るのに言葉が出てこない。

ここで口を出せるほど、私はまほのことも、戦車道のこともよく知らなかつた。

名前の出た人たちが、どういう人なのか半分もわからなかつた。

メイさんかユリさんがこの場にいれば、と縫るような思いが湧いてきた。

だけど、まほはこの二人に弱音は吐けないのだ。

だからこそ、私が何かを言わないといけないのに言葉は出てこない。

「それだけじゃない。大洗が決勝に出てきて黒森峰と戦うことになるくらいなら、その前にプラウダに負けてしまつて欲しいとも思っている。いや、いつそのこと黒森峰が聖グロに負けてしまえば私は楽になれるとさえ考えている。これが卑怯者じゃなくてな

んだ？」

「……」

そんなことない、と言いたかった。

けど、まほ自身がこう言っているのに否定なんて出来るわけがなかった。

「こんな私よりも、全身全霊で勝とうとしているダージリンの方がはるかに立派だ」

まほの顔には、もう作り笑顔は浮かんでいない。

眉間にしわを寄せて、唇をきつく噛み、視線を机の上に固定している。

強く握った拳は今にも視線の先の机に振り下ろされそうだった。

あの夜のように、そうしてしまったほうが楽になれるんじゃないかと思えた。

私に当たってくれてもよかった。

なのに、いつまでたっても、まほは耐えていた。

「まほ……」

かなり時間が経ったあとで、やっと私はそれだけ言った。

まほは、それに

「すまない、また変な愚痴を聞かせてしまった」

と答えて、顔をあげて

「もう大丈夫だ。帰ろう」

と暗い顔のまま言って、立ち上がった。
私について行くことしかできなかつた。

Side 砲手5

「流言飛語は聖グロの常套手段じゃない！ 栄光ある黒森峰の生徒が惑わされてどうするの！」

チームの結束を図るため、急遽ユリが席を取ってくれた学園艦上のファミリーレストラン。

エリカが赤星たちに説教してるのを頼もしく思いながら、まほのことを考えずにはいられなかった。

練習後、まほにこの会を開くと伝えると

『……すまない』

と、暗い顔で言ってきた。

去年の大会後より、一段と暗い顔だった。

メイは『私たちがいると、まほも愚痴を言えないだろうから茅野ユウに任せておこう』
と言っていた。

私も賛成したとはいえ、心配ではある。

「まほさん、大丈夫でしょうか」

隣に座っているユリが言った。

「まだ隠し事をしていたりしませんよね？」

それも心配の一つだった。

ないと思うが、なくはない。

一回戦が終わるまで、みほのことを隠していた前科もある。

みほのことを師範から咎められていて、そのことで何か言われているのに黙っている、なんてことは十分に考えられた。

でも。

「何にしろ、私たちは明日の試合も勝って、まほを優勝させる。それだけだろ？」

「……そう、ですね」

ユリがエリカに向き直った。

「はい、副隊長。お説教は終わりにして、今日はパーツとやりましょう！」

「ユリさん、話はまだ……」

「はいはい、じゃあみんな！ 黒森峰特製ノンアルコールビールは持ってますねー！」

ユリの強引なノリに乗って、ジョッキを掲げる。

エリカのおかげか、ひとまずは明後日の試合に集中しようという空気になんて変わって

た。

昼どきのバラバラな感じではなくなっている。

「せーのー！」

乾杯。

ユリの音頭にあわせて、ジョッキを掲げ合う。

一番、心配だった赤星も同じようにジョッキを掲げている。

他の二年生も同様だ。

一年生、三年生もユリの勢いに流されてか、笑顔を浮かべていた。

しかし、どこか虚ろな感じがするのは否めない。

「明日の試合については私が指揮を執る。よつて、急なことで悪いが今日の練習も私の指揮で行うことにする」

次の日、まほは練習前の訓示で言った。

そう言いはじめるかも、というのは、みほの噂が聞こえてきたときから予想していた。

理由は三つある。

一つめは、三回戦では指揮の迅速さが求められるからだ。

二回戦までのように、エリカが指揮を執り、まほが随時修正するのでは、どうしても行動が鈍くなる。

ダージリンほどの隊長が相手となると、その隙をどう突かれるかわからない。チームの動揺を鎮めるといふ意味でもそうだ。

エリカ—まほ—各車という指揮系統より、まほ—各車という単純な構造の方が有利だった。

二つめは、エリカの指揮能力がダージリンのレベルまで達していないからだ。相性も悪い。

エリカが得意とするのは「隊員を強い言葉で奮い立たせ、勢いに乗って攻める」という猛将型とでも言うべき戦い方だ。

このタイプの通弊である、冷静さを失いやすいという弱点も濃厚にもっている。

対してダージリンは「挑発、伏兵、誘引」といった多彩な戦術で相手を自分の望む状態へ追い込む智将型だ。

こういうタイプに勝つには、相手の意図を読みきる作戦理解力と冷静さが必要になる。

エリカには悪いが、まだ我々が副隊長はこのレベルには達していない。

三つめは、敗戦の責任をエリカに負わせないためだ。

これについてはエリカがアカネあたりが聞けば、憤慨しただろう。

『隊長！ 黒森峰がそんなことで負けるわけがありません！』

そんな抗議をするのが目に見えるようだった。

でも、まほが感じたのであろう敗戦の予感、この練習中に形をもって現れた。

「……四号車、どうした？」

砲撃訓練中、まほが無線に手を当てて言った。

すべての車両が目標にむけて砲撃する中、パンターの四号車だけが砲撃しないのだ。

無線のトラブルか何かで指示が聞こえなかったのかと思われたが、返事はすぐに帰ってきた。

「す、すみません！ いま……すぐ！」

何か慌てている様子だった。

「落ち着け。トラブルがあったのなら状況を報告してくれ」

このとき四号車から上がってきた報告はたぶん、まほが隊長に就任してから初めてのものだった。

「す、すみません、装填口に煤すすが溜まって、砲弾が……」

戦車砲は、一度撃つたびに煤が溜まる。

だから練習が終わったあとは念入りに掃除する。

しなければ固まってしまつて、いろいろと支障をきたすからだ。

戦車に乗っているなら常識のはずで、よほど他のことに気を取られていなければ忘れることはない。

まして普段時は、車両、機材の管理を徹底している黒森峰なら、なおさらだ。

しかし残念ながら、昨日は普段通りではなかった。

それにこの車両の乗員は二年生が主で、みほと仲のよかつた隊員が多く乗っていた。

「……ふう」

まほが大きく深呼吸した。

それから、いつもより穏やかなくらしいの口調で言った。

「そうか、なら装填口だけでなく、砲塔内の汚れも確認して、問題がなければ訓練に合流してくれ」

「す、すみません！」

「昨日のこともあつたし謝ることはないが、以後は気をつけるように」

それからも普段なら絶対に起きないような問題は発生した。

各車両間の連絡ミスによる誤射。

明らかな整備不良による履帯の破損。

そんなことが次々に起こつた。

溜まったフラストレーションが爆発したのか、隊員同士の口論すら起こった。

「レン、頼む」

練習中に口論の仲裁を頼まれて戦車から降りるなんてことも初めてだった。

この分だとユリやエリカも駆り出されることになるだろう。

「サトミ、マキ、どうしたんだ？」

「レンさん……」

強豪と言われるチームほど『隊長のために』とか『隊長と一緒に戦いたいから』とかいう理由で戦車道をやっているやつが多い。

いい隊長の下で働くのは気持ちがいいのだ。

私にもよくわかる。

そう言う感情は『この人について行けば間違いない』という依存心とも呼ぶべき感情を伴うのも、よくわかっていた。

そして黒森峰は、どの学校よりも『この人について行けば間違いない』という感情が強い学校だと言ってよかった。

なにせ、西住まほ隊長だ。

『この人について行けば間違いない』

という神話を補強するエピソードは事欠かない。

小学校のときから同級生では最強。

中学時代は負けなしのスター選手。

高校に入ってから国際強化選手。

テレビにも出ていて、戦車道を知らない人にすら知名度がある。

それだけでも憧れるのに、実際に接すると優しいし、責任感が強くて、立ち居振る舞いにも隙がない。

カッコいい戦車女子というと、いの一歩で名前が挙がる。

まだ小さいときの姿を知っている私やメイはともかく、他の隊員から見れば実感としてもそうだったのだろう。

前回大会での敗北は天候のせいということができたし、それまでは無敗で、その後も無敗だった。

何より、まほの戦車道は厳しくはあるが、自分の力を引き出してもらっているという喜びがある。

その『この人について行けば間違いない』という神話が昨日で崩れてしまった。

戦争では、どんなに大軍を有していても、主将が信頼できない人物なら絶対に負けるという。

それと同じことが起こったのだ。

こういう混乱も仕方がないのかもしれない。

「気が立っているのはわかるが、試合は明日なんだぞ。そんな日に口喧嘩なんかされちゃ困る」

「……すみません」

そんなことを言っているうちに、また言い争う聞こえてきた。

予想した通り、隊長車からユリが駆け向かっていく。

天下の黒森峰が見る影もない。

「では、いつも通り隊長車対副隊長チームの紅白戦を行う」

「……はい」

まほがそう言ったときには「何とかここまで漕ぎつけた」という気分だった。

隊員全員が似たような状態なのか、返事にも力がなかった。

夜戦訓練のために徹夜したときだって、ここまで疲れてはいなかったはずだ。

「さあ、今日もチャチャつと後輩たちを片付けてやりましょう！」

ユリがつとめて明るく言ったのが、逆に虚しく響いた。

「そ、そうですね！ 明日は聖グロ戦ですから景気づけの意味を込めて！」

アカネが同調したが、それも空々しい。

メイだけが普段通りに黙々とエンジンの調子を確認しているのが、今は頼もしかっ

た。

「まほ」

振り向いて名前を呼ぶと、まほが首元の無線機に手を当てた。

「試合開始！」

手始めに包囲を狙って左右から襲ってきたパンターを撃破した。

残りはエリカのティーガーIIと、ティーガーI、待ち伏せを得意とするエレフアントの三両。

今度はこちらから攻撃に出て、エリカのティーガーIIとティーガーIに接触。

ティーガーIの方を撃破して離脱。

残りは二両。

「さすが隊長、冷静ですね」

いったん暇になったからか、アカネが囁いてきた。

うなずきを返して、私も一度砲から手を離し、休憩がてら首を回す。

緊張がほぐれたからか、大洗女子のことが脳裏をかすめた。

(もし大洗がプラウダに勝って、決勝まで進んできたらどうなるか)

可能性は低いがない話ではなかった。

大洗は雑多な戦車の寄せ集めとはいえ、火力については並の高校より高い戦車を持つ

ている。

隊長のみほも黒森峰では萎縮していた感じはあるが、その発想力には小さいときから驚かされたものだった。

他のメンバーも一回戦、二回戦を見たところ、初心者とは思えないほど動いていた。油断はならない。

対してプラウダは前回の練習試合のときに見た感じだと、少し気の緩みのようなものが見えた。

カチューシャの作戦能力。

ノンナの射撃力。

この二つは脅威だが、それも他の隊員の働きがあつてこそだ。

プラウダが大会前に練習試合を組んできたのも、今思えば前回の優勝で緩んでいた隊員の気を引き締める目的があつたのではないか。

(もし大洗がプラウダに勝つて、決勝まで進んできたらどうなるか)

そうなったら大洗と戦うのは、もちろん私たちたちの黒森峰だ。

断じて聖グロではない。

だけど、そうなつたとき、まほはどうなるのか。

妹がせっかく作つた居場所を、まほが壊すことになる。

妹が一人でおつかいに行くことすら過剰に心配していたようなお姉ちゃんだ。

師範とみほの関係も気にかかる。

師範は厳しい人だ。

特に人との約束を破るような不誠実なことは大嫌いな人だ。

みほは約束を破っている。

『勘当』ということだつて、考えていてもおかしくない。

だとすると、まほは妹の帰る家さえ壊すことになる。

こういう状況に追い込まれた人間が、勝ちに徹することができるのか。

(私は、まほを信じていいのか?)

ふと、そんな疑問が頭をかすめた。

その瞬間、まほが叫んだ。

「三時方向、エレファントだ!」

体が勝手に砲塔を回転させた。

頭脳も自動的に照準器のレンジから彼我の距離を計算している。

エレファントを照準に捕えた。

「レンー!」

まほが私を呼んだ。

指が引き金を引こうとした。

が、その瞬間、一瞬だけ私の心を疑念が支配した。

(私は、まほを信じていいのか?)

一瞬、引き金を引くのが遅れた。

その間に轟音が鳴り響いた。

私たちのティーガーが砲撃したからではない。

私たちが砲撃を食らった音だった。

しゅぽつという、間拔けな、小学校以来久しぶりの、高校に入ってから初めて聞く音が頭上でした。

Side ライバル3

「戦車女子には二種類の人間がいるわ」

「一つは『西住まほと一緒に戦いたい』と思う人」

「もう一つは『西住まほに勝ちたい』と思う人」

「オレンジペコ？ 私がどちらの人間なのか、知っています？」

「……そう、私は後者の人間。それも恐らく、誰よりも情熱をもって西住まほに勝とうとしてきた人間だと自負しているわ」

「小学校の低学年のとき」

「私が戦車に乗るということがどういうことなのか、少しずつ分りはじめていたころ」

「あのとき全国大会でパンターを駆る西住まほの姿を見たときから、そればかり考えてきたのだから」

「自分の作戦能力の未熟さを痛感した私は、研究のために戦史・戦術の学術書や、マキヤベリ・韓非子のような本も読み尽くしました」

「人の上に立つ者としても負けていました。ですから必要だと思った学問……哲学、心理学、経営学、歴史学、文学、果てにはプロ野球選手の本まで読み漁りましたわ」

「戦車の特性も調べ直しましたし、車長以外のポジションをやってみたりもしました」

「この聖グロリアーナ女学院に入学してからもそう」

「さきほど言ったようなことを続けるのはもちろん、新たに隊長としての立ち居振る舞いを学び、磨きこくこともしてきました」

「それだけではないわ」

「お小言の多いお姉さま方を説得してクロムウエルを導入したのも」

「G I 6を再整備して情報収集力を強化したのも」

「アツサムに付きつきりで黒森峰の情報収集にあたってもらったのも」

「先日、黒森峰に大洗女子が廃校になるという情報を流したのも」

「全てはこのため」

「まるで恋のような、この思いを実現するため」

「私にとつたら戦車道とは恋そのものと言えるかもしれないわ。みんなはどうかしら？
この思い、わかってもらえるかしら？」

「どう、アツサム？」

「アールグレイ？」

「ルフナ？」

「エリヤ？」

「……そう、ありがとう。セイロン、ルクリリ、キャンデイ、ケニア、オレンジペコ、ジャワ、ローズヒップ、バナラ、ニルギリ、グランベリー、貴方たちはどうかしら？」

「……フフツ、みなさん血の多いこと」

「でも、そういうことなら、みなさんにも私の恋が成就するのを手伝ってもらいましょう」

「戦車道とは、武道なんていう生易しいものではない」

「まして遊びなんて妥協が許されることでもないでもない」

「それを黒森峰の方々に見せてさしあげましょう」

「戦車道とは恋」

「恋とは戦争よ」

「そして聖グロリアーナの生徒は、その二つで手段を選ばない」

Side クラスメイト6

試合前の挨拶を観客席から見ている

(あれ、やっぱり大丈夫なんじゃない?)

と、思ったほど、まほの姿は平静だった。

でも、後ろに並んでいる黒森峰の隊員たち姿が目に入ると、それが希望的観測でしかないことが、ありありとわかった。

パツと見渡しただけで六人。

チラチラと視線をまほの方に向けていた。

黒森峰の隊員は試合前のあいさつのとき、ロボットのようになまなまとしてジッと前を見つめているのが常だ。

それが崩れている。

「いい試合にしよう」

「ええ、そうね。お互いに全力を尽くして、ね」

試合開始の合図とともに、両校の戦車が動き出す。

今回の戦場は砂漠地帯。

黒森峰にとっては2試合連続の砂漠地帯での試合だ。

二回戦との違いといえば随所に高低差があることくらいで、慣れのアドバンテージがなくなるほどの違いはない。

戦場は黒森峰に有利と言えた。

戦車の性能だって、黒森峰が圧倒していた。

黒森峰がティーガーやパンターなどの大戦末期の戦車を多くそろえているのに対して、聖グロはOB会との兼ね合いとかで有力な戦車をそろえられないでいる。

各隊員の能力だって、どこよりも練習している黒森峰が勝っているはずだった。信じられないような遠くから正確に的を射抜く姿。

隊長の指示を素早く理解して行動に移す姿。

私はこの目に見ているのだ。

指揮官の能力だって、まほが勝っているはずなのだ。

(だから、負けるわけがない)

自分に言い聞かせて大スクリーンをジッと見つめた。

『聖グロは強敵だが、油断せずに戦えば必ず勝てる相手だ。気を引き締めて行こう』

でも、いつもはそれだけで勝ちを確信できるはずの声が聞こえてきても、私の胸はざわついたままだった。

その声には力がないように聞こえた。

『では、みなさん。手筈どおりに』

その後の聖グロの隊長の声の方が、はるかに力があるように聞こえた。

それほど待たずに戦闘は始まった。

戦場全体を見渡せる高地を確保しようと両校が動いて、その途中で始まった形だ。

先制したのは聖グロ。

しかし遠距離射撃だった。

まんまと自分たちから黒森峰の得意な遠距離戦という土俵に足を踏み入れたことになる。

黒森峰は早速、反撃して数台の車両を撃破した。

『オレンジペコ？ 去年負けて、副隊長も転校してしまって、戦力も大幅に落ちているはずの黒森峰がどうして未だに優勝候補の筆頭とされているのか、その理由がわかる？』

『戦車の性能と隊員の練度……: : : だけではないですね。それと西住まほ隊長の統率力、作戦力が合わさるから、でしょうか？』

『さすがね、ペコ。でも十分ではないわ。もつと単純で、強力で、根本的なアドバンテージが黒森峰にはあるのよ』

『と、いいますと?』

『わからないかしら。アツサム、教えてあげて』

『フラッグ車を撃破できないから』。データによると『西住まほの車両は練習試合を含めて昨日まで一度も撃破されたことがない』。それも頻繁に、三対一、五対一と圧倒的に不利な状況で戦っているにも関わらず』

『なるほど、大会ルールでフラッグ戦と定められているのに、そのフラッグ車が倒せない。だから最強……』

『そういうことよ。ね? 単純でしょう?』

スクリーンには各車の大きな動きが表示されている。

それによると、まほは先に高地の確保に成功したようだった。

これで戦術上、優位に立ったことになる。

というのも、たとえば低地で視界を遮られた状態だったら、隊長は頭の中の戦況図だけ

を頼りに指揮を執らなければならない。

けど、見晴らしのいい高地にいれば戦況が一目で状況がわかるようになる。

その分、指揮がスムーズになるのだ。

『この落ち着き様から察するに、まほさんが指揮を執っているのね』

『そのようですね、とすると』

『そろそろ別動隊が来るわね……出番よ、ローズヒップ』

それから戦況は慌ただしく動いた。

黒森峰の別動隊が聖グロの本体に襲いかかって乱戦になり、さらにそこへ聖グロが控えさせていた快速戦車のクルセイダーとクロムウエルが砂を巻き上げながら乱入。

主戦場の中央部は敵味方の区別もつかない大混乱に陥った。

まほがいる高地からも、このふんどと戦況はわからないはずだった。

『ダージリン様、一つお伺いしてよろしいでしょうか？』

『なに？ なんでも聞いてみなさい？』

『西住まほ隊長が凄いのはわかりました。でも、だったら余計にこんな作戦は取らない方がいいのでは？』

『普段ならそうね。でも今日に限っては勝機があるわ』

『みほさんのことで動揺しているから、ということでしょうか。でも試合前にお会いしましたが、とても動揺しているようには見えませんでした。隊員の方々は、そういう傾向も見受けられましたけど』

『ペコもまだまだだね。いい？ 覚えておきなさい。隊員が動揺しているのに、動揺しない隊長はいないわ』。ただ、それを隠せる隊長がいるだけ』

『……すみません、誰の言葉でしょうか』

『あら、聖グロリアーナ女学園ダーズリン隊長の言葉よ。知らなかった？』

『これは失礼しました』

『ふふっ。それともう一つあるわ。アツサムよ』

一番戦況がわかったのは、私たち観戦者だっただろう。

砂嵐の中でもスクリーンには各車の位置が表示され続けていたし、適時、隊長車の様子も画面に映ってきた。

だから私たちにはわかった。

砂嵐と混乱に乗じて、聖グロの隊列から隊長車チャールが離脱したのが。

チャールがまほのいる高地に向かって移動し始めたのが。

そして、まほがそれに気づいていないのが。

『アツサム様ですか？』

『ダーズリン、恥ずかしい話なら気が散るのでやめていただけですか』

『いいじゃない、減るものじゃないわ。それでペコ？ 高校戦車道界の砲手を上から三人あげるとすると、誰になるかしら。』

『ええと、プラウダのノンナさんは真つ先にあがりますね。あとはサンダースのナオミさん、黒森峰の高松レンさん、あと……』

『そこまででいいわ。たしかに聖グロのアッサムはその三人と比べると平均的な成績では劣りますもの』

『……ダージリン？ 怒りますよ？』

『でもね、アッサムについてこんな評もあるわ。〃ここ一番で絶対に外さない砲手。この点については全ての砲手の中で頭一つ抜けている〃という評が、ね』

『……』

『では、なんでこういう現象が起こるのでしよう？ ペコ、わかる？』

『精神的な強さから、でしょうか？』

『あら、そんなことないわよ？ アッサムは中学校のときまで……』

『ダージリン！』

『ふふ、真面目に言うとなね、アッサムほど相手を調べる砲手は他にいないからよ。並の砲手なら相手の車両スペックと大まかな特性くらいを覚えたくらいで満足してしまうけど、アッサムは違うわ』

『目標の車長はどういう状況で、どう動く傾向にあるのか？ どういう性格か？ 戦車道に対する姿勢は？ 利き手はどちら？ 身長体重は？ 趣味嗜好は？ 操縦手との関係はどういうもの？ 砲手とは？ 装填手とは？ 通信手とは？』

『そういうところまで調べているわ。これだけ調べてしつかりと頭に入れているから相

手がどんな動きをしても無意識のうちに対応できるのね』

『特に、グッこ一番の相手になる可能性の高い強敵』ほど調べている。だから、グここ一番に出くわしたときに強い』

まほの周りに味方の戦車はいない。

自分たちの乗るティーガーIだけで孤立している。

他の戦車は高地を降りて、砂嵐の中で戦っていた。

まほの双眼鏡で戦場を覗いている表情は変わらない。

けど、状況がわからないことで少なからず焦っているようでもあった。

通信手のユリさんが味方の戦車と連絡を取ろうとしている姿が、しきりにスクリーンに映されていた。

そこへ少しずつチャーチルが近づいている。

まだ、まほは気付いていない。

『そのアツサムが一番調べていたのが西住まほ。しかも他のところと違ってアツサムがその眼で見えてきた生の情報を持っている』

『見ていなさい。アツサムはあげるわよ』

『高校戦車道界、最大の大金星を』

砂嵐が収まってきて、やっと異変に気付いたようだった。

チャーチルはどこだ、と前線で戦っていた隊員に質問を飛ばしている。距離200とスクリーンに表示されていた。

まほの目が、一瞬、鋭くなった。

やっとティーガーが動きはじめる。

『さあ、アッサム。やってあげなさい』

チャーチルが姿を現した。

砲身は真直ぐにティーガーの横つ腹に突きつけられていた。

ティーガーはまだ砲塔が回り切っていない。

まほが息を呑んだのが、はつきりとわかった。

それから諦めたように眼を閉じるのも。

『チェックメイトよ』

Side 砲手6

まほは朝から虚ろな感じがしていた。

何というか覇気がなかった。

試合前に偶然、聖グロの生徒とぶつかったときもそうだ。

もともとが温厚な性格だからこの程度で怒るような奴じゃないのはそうだが、試合前ともなると、気の弱い奴なら顔を見ただけで怯えて逃げていくくらいの緊張感が体に漲るのが常だった。

試合前、あんな風に笑って

「いいんだ、大丈夫か？」

何て言ったのは、今まで一度もなかったと断言していい。

試合がはじまってからもそうだ。

素人から見ると

「西住流ならではの速攻」

くらいに見えたかもしれないが、そうじゃない。

そこには、あるべき慎重さが欠けていた。投げやりという感じすらあった。

「まほは負けたがっているんじゃないか」

また頭の中で誰かが言った。

「なあ、まほ。この戦況、どう見る？」

高地の占領に成功したあと、そう聞いてみたのは偵察のようなものだ。

聖グロの行動には明らかに意思がある。当然、まほも私と同じことを感じているはずだ。

それにどう対応するのか。

そういう質問だった。

いつものまほなら、この段階で相手が取りえる作戦を二つか三つくらいまで絞っている。

すでに作戦を詳細に至るまで見破っているのも珍しくない。

ところが、まほの答えは

「そうだな、珍しくダージリンが焦ってくれたおかげで優位に立てている。このままいけば押し切れそうだな」

というものだった。

「……何かの罨、だとは思わないのか？」

そう言っただけで、やっとその可能性に思い至ったようだった。

「罨……？」とつぶやいて、それから数秒の間があつて、また「そうか、罨……罨か」と、つぶやいた。

メイも、ユリも、アカネすら、まほの姿を心配そうに見つめていた。

「まほさん、大丈夫ですか？」

場の変な空気に耐えかねたのか、ユリが言った。

「いや、すまない。それでレン、ダージリンはどう出てくるだろう？」

「……普通に考えたら主力の包囲殲滅狙いだろう。そのために快速戦車を控えさせてるんだろうしな」

「そうか……そうだな」

まるで操り人形のように。

表情だけはいつもと変わらないだけに、余計そう見えた。

アカネが私に視線を向けてくる。

明らかに不安を覚えている顔だった。

私としては無視するしかない。

しばらくして戦況が動いた。

聖グロの快速戦車が投入されたのだ。

だが、その動きは私の予想と違った。

こちらに攻撃するでもなく、砂を巻き上げながら戦場を走り回ったのだ。

三両の快速戦車が巻き起こす砂塵のせいで、私たちのいる高台からの視界は一気に悪くなった。

おそらく意図は指揮車と主力を分断することにある。

黒森峰の上意下達の特徴から言って、指揮車と分断されれば混乱すると踏んだのだろう。

正面から乱戦になったら黒森峰が有利だが、その混乱を突く形なら聖グロにも勝ち目がある。

今度はまほちゃんと同じことを考えていてくれたのか、無線に手を当てて言った。

「エリカ、聞こえるか」

「はい隊長」

「お前の位置なら味方は把握できるな?」

「はい、敵のマチルダの位置も、うつつすらと確認できます」

「そうか、では主力の指揮をエリカに任せる。密集隊形で近づいてきた敵だけを撃破しろ。聖グロの火力は高くない。それで十分に対応できるはずだ」

「了解しました」

まあ、無難な対応だ。

しかし、胸騒ぎがした。

私たちの視界の下に広がる黄色い煙の中で、何かが起こっている

まほもこの「何か」を感じているようで険しい顔で双眼鏡を覗いていた。

やつとエンジンがかかり始めたようだ。

高地の麓、砂塵の中からは砲声が断続的に聞こえてくる。

主力同士が戦っている音だ。

「パンター三、五号車撃破されました。敵のマチルダも二両撃破」

エリカから上がってくる情報をユリがボードに書き足していく。

とりあえず、今のところは消耗戦という様相だ。

このままのペースで行けば、仮にこちらの主力が全滅するときに相手のフラッグ車が残ったとしても、残存は多くて二、三両といったところだろう。

だとすれば、私たちが十分に掃除できる。

そう計算しても、胸のざわつきは取れない。

そんな矢先、まほが言った。

「晴れてきたな」

照準器を覗くと、たしかにさつきよりも視界が開けていた。

何となくマチルダかクルセイダーかくらの見分けがついてきた。

さつき聖グロのクルセイダーを一両撃破したという報告があったので、そのせいだろう。

あの視界の悪い状況下でもエリカは戦況を把握できていたようで、残りはマチルダ7両、クルセイダー1両とほぼ報告と同じだった。

ここで、ふと気づいた。

チャーチルがない。

その瞬間、まほが叫んだ。

「レン、メイ！　後ろだ！」

ふざけんな。

急いで砲塔を旋回させる。

照準器の中の光景が猛スピードで横に流れていく。

照準の片隅にチャーチルが停止しているのが見えた。

明らかに砲撃態勢に入っている。

間に合わない、と頭の片隅で誰かが言った。

(ふざけんな)

私の肩をつかんでいたまほの手からフツと力が抜けた。

やっと楽になれる。

まほがそう言った気がした。

(ふざけんなっ！)

「メイ、旋回止めろッ!!!」

気付くと叫んでいた。

メイが指示通りにブレーキをかけてくれたのが、車体の揺れでわかった。

その瞬間、轟音がして、一層車体が揺れる。

今度はチャーチルの砲弾が当たったことによるものだ。

が、あの間抜けな音はしなかった。

装甲が砲弾を弾いたのだ。

照準がチャーチルを捕える。

いつもの優雅さとやらはどこえやら、目を見開いて驚いているダージリンの顔が目

入った。

ざまあみろだ。

まほの指示は待たずに引き金を引いた。

白煙があがる。

それが晴れると、チャーチルから白旗が旗があがっているのが見える。

「レン……」

振り返ると呆けた顔のまほがいた。

Side クラスメイト7

「……っ！」

まほが戦車から降りてきた瞬間、私は目を逸らさずにはいられなかった。もう見ていられなかった。

どう見ても、まほは限界だった。

『隊長を務める以上、少なくともマイナスの感情を顔に出すべきじゃない』
そう言っていた表情に、あからさまな疲れが浮かんでいた。

「……」

それでも、まほは戦車から降りると聖グロの隊長車の方に向かっていく。聖グロの隊長も気づいて戦車を降りてきた。

両校の隊長が対面する。

まず、聖グロの隊長が頭を下げたことから話ははじまった。

「まほさん、ここ数日、貴女にとつては辛かったですでしょう。謝罪するわ」
「いや、効果的な作戦だった。謝ることはない」

聖グロの隊長は、ちよつと目を伏せて言った。

「……これはお詫びの印ということにして欲しいのだけど、みほさんのことは心配いりませんわ」

そこから続いた言葉は私に希望を抱かせた。

これならまほは苦しまなくて済むんじゃないか、と。

「どういうことだ？」

「大洗が廃校になったら、みほさんは聖グロリアーナ女学園が責任をとって引き取るということですよ。関東の聖グロなら西住流の力も及ばないわ。大洗にも近いですし、みほさんの転校先にはピッタリじゃありません？」

「……」

「みほさんだけではないわ。みほさんの乗るIV号戦車の乗員は全員に聖グロに転入していただきます。もちろん待遇も相応のものを用意します。学費免除、衣食住の保証、IV号のチームは本当にいいチームですから戦車だつてつけましょう。今日お見せしたクロムウエルは、みほさんにピッタリだと思っただけ」

けど、まほは首を横に振った。

「ありがとう。だが、申し出は断らせてもらおう」

「……どうしてか、伺つても？」

「みほのことは西住家の問題だ。それにもともと、姉として私がお母様とみほの間を取

り持たなければいけないかったんだ。今度こそ、その責任を果たさなければならぬ」
まほが背負うことじゃない。

そう言っただけなのに、今は声が届かない。

もどかしい思いでいると、私の代わりに聖グロの隊長が言ってくれた。

「そんなことが貴女にできるの？ できなかったから、みほさんは大洗にいるのではなくて？」

まほはもう一度、首を横に振った。

「それでもだ。できなくても、やらなくてはいけない」

その言葉を最後に聖グロの隊長から背を向けた。

スクリーンに映る背中にはフラフラとしていて『西住流の後継者』というには、あまりにも弱々しくて、頼りなかった。

試合のあと、私は学園艦に引き返していく黒森峰の応援団の生徒たちから分かれ、まほを探しに行った。

何も言えるものではないのはわかっていた。

けど、何か言っただけじゃないといけなかった。

しばらく探すと、戦車の倉庫から高松レンさんの荒々しい声が聞こえてきた。覗いてみたら、まほと高松さんが向かい合っていた。

まほは向こうを向いていて、表情がわからない。

けど、高松さんの表情はわかった。

一杯に見開かれた目が、まほを睨みつけていた。

私は咄嗟に物陰に隠れた。

すぐに荒々しいレンさんの声が聞こえてきた。

「さっきの試合は、何だっけ聞いてんだよー」

もうほとんど怒鳴り声だった。

聖グロの隊長と一騎打ちになったときの、まほの気の抜けた表情を思い出す。

あの時、どう見ても諦めていた。

指示も出している様には見えなかった。

なのにティーガーは突然旋回を止めるといふ、たぶん聖グロの隊長車にとって予想外の動きをして砲撃を弾いた。

乗員の役割を考えると、このときの対応を指示したのは砲手のレンさんに違いなかった。

とすると、レンさんはまほが諦めていたことに気付いていたことになる。

この怒りは、そういう怒りだった。

「……すまない」

そう言ったまほの顔は、私が見たことのない表情だった。

今にも泣きそうだった。

あの夜、闇に隠れていた表情は、もしかしたらこんな顔だったのかもしれないなかった。

「謝れつつてんじゃねえんだよ！ 答えろ！ さっきの試合は！ 何だったんだッ！」

レンさんは目を見開いて、胸倉に掴みかかった。

乱暴に体を揺すりもした。

「……本当にすまない」

まほがもう一度そう言った瞬間、レンさんは手を離れた。

急にそうしたから、まほはバランスを崩してフラついた。

その顔面に拳が飛んだ。

文字通り宙を舞って、思いきりコンクリートの床に叩きつけられた。

「……もう、疲れたんだ」

仰向けに倒れたまま、まほが言った。

殴られた後とは思えないほど無感情な声だった。

「黒森峰の隊長でいるのも、西住流の後継者と言われるのも、もう疲れてしまったんだ。

でも西住流の後継者でいることはやめられない。だからせめて、はやく黒森峰の隊長でなくなつてしまいたかつたんだ」

今度は起き上がりながら言った。

左の頬にくつきりと拳の痕がついていた。

その赤い痕を透明なものが一筋つたつていた。

「……お前が隊長じゃなくなつたら他の隊員はどうなんだよ」

「考えてなかつた。ただ、楽になりたかつた」

まほの頬を伝うものは、どんだん量を増してきていた。

顎をつたつて床にポタポタと垂れはじめた。

その顎に拳が飛んだ。

半身を起こしていたまほの体が横に回転して、床に顔が当たりそうになるところをギ

リギリで両手が止めた。

「お前、さてはアタシらがどんだけ頑張つてお前について来てたか、わかつてねえんだな

? だから、んなふざけたことが言えんだな?」

レンさんの手が、また胸倉をつかんだ。

無理やりに立たせて体を揺すりはじめた。

「わかつてるッ!!」

まほが叫んだ。

レンさんの手を振り払って、今度は逆にレンさんの胸倉をつかみ返した。

けど、まほは乱暴に相手を振り回こともなく、逆に縋りつくようにレンさんの体を引き寄せると、その胸に顔をうずめてしまった。

「わかつてるんだ。お前が毎日遅くまで後輩たちを指導してたことも、メイが休みの日まで使って操縦の練習をすることも、ユリがどれだけ頑張って二年でレギュラーになれるだけの勉強をしたかも、エリカがどれだけのプレッシャーの中で副隊長をしてくれるか、全部わかつてるんだ……だけど、もうダメなんだ」

まほの顔は見えない。

だけど、さっきまでとは比べ物にならないほど、はつきりと肩が震えていた。

「何がダメなんだ。プラウダには何度も勝ってるし、大洗に至っては押しも押されぬ弱小校じゃねえか」

「みほがいる。みほはどうなる？ みほはもう十分苦しんだんだ。なのに、もし大洗が勝ち上がってきたら、私がみほを倒さないといけないのか？」

普段の凜々しい西住隊長は、どこにもいなかった。

そこにいるのは一人の妹思いのお姉ちゃんで、辛い状況に追い込まれて友達に甘える私たちの同級生だけだった。

「もう嫌なんだ。助けてくれ、レン……」

レンさんも、さっきまでのピリピリした雰囲気ではなくなっていた。

固く握られていた拳は開かれて、縋りついてくるまほの頭を撫でていた。

「……」

かなり長い間、二人は何も言わずにそうしていた。

数日後、大洗女子がブラウダに勝ったという情報が届いた。

映像の中では、みほちゃんが仲間たちと嬉しそうに笑いあっていた。

まほも試合を見に行っていたそうだが、試合終了の宣言があった瞬間、どんな顔をしていたのだろうか。

Side ライバル4

プラウダ高校の隊長、地吹雪のカチューシャが大洗の廃校を知ったのは、その大洗との試合に敗れてからだだった。

反省会のために試合映像を見ている時に

「廃校」

という言葉が大洗の生徒から飛び出してきたことで知った。

知るなり電話をかけた。

こういうことには誰より耳聴く、妙に大洗のことに詳しくなった友人に。

そして自分と同じく準決勝で敗れた、同じライバルを持つ同志に。

「……なに？」

電話越しに聞こえてきた声は、あからさまに機嫌が悪かった。

彼女のことを表面的にしか知らない者だったら、この声を聞いた瞬間、恐れ慄いて電話を切ってしまったことだろう。

しかし、このカチューシャという少女は元来、負けん気が強い。

(何よ、この態度は！)

と、むしろ気を強くして問いかけた。

「あなた知ってたわね？」

何を、が抜けた言葉。

だけど意味は伝わっている。

そういう確信があつた。

だから受話器から

「何のことかしら？」

と、とぼけた声が聞こえてくると声を高くした。

「大洗の廃校のことよ！ 知つてて黙つてたんでしょ！」

一呼吸の間。

受話器から漂ってくる重い沈黙。

それから「……ハア」という心底から煩わしそうな溜息。

「……何よ？」

「貴女には関係なさそうだったから言わなかっただけ。他意はないわ」

「関係ないって……大洗は対戦校よ!? 関係ないわけじゃないじゃない!!」

「いいえ、関係ないわ。貴女は『自分たちが負ければ相手が廃校を免れる。なら、負けて

あげよう』なんて考えるの？」

「それは……」

カチューシャは言い澀んだ。

たしかに廃校がかかっていようが何だろうが、負けてあげるつもりなどなかった。

「ね？ 関係ないでしょう？ 知っていたにせよ、知らなかったにせよ、することは変わらないんだから。わかってもらえたかしら？ 電話、切ってもいいわよね？」

「ま、待ちなさいよー」

本当に電話を切るような気配を感じ、一層声を高くして呼び止める。

違うのだ。

もともとこんなことが言いたくて電話をかけたわけではないのだ。

大洗廃校。

それを聞いて彼女の頭に浮かんできたのは、大洗の学園艦に乗っている人たちの将来でも、隊長の西住みほへの心配でもなかった。

大洗女子とは直接の関係はない、彼女のライバルが浮かんだのだ。

「だから何かしら？ 私も暇ではないのだけど」

しばらく黙っていると、受話器から声が聞こえてきた。

妙に棘のある声だ。

その棘は、人の三倍は強い負けん気を刺激した。

「西住」みほの母校が廃校になると聞いて、あのライバルが頭に浮かんだのは通話している相手と同じはずではないか。

そして、この友人なら何か解決策になるものを用意しているはずなのだ。そう思ったから電話をかけたのだ。

なのに、この態度はなんだ。

まるで話を逸らして、無理やり速く話を終わらせたがっているような態度は。

そう考えたとき、彼女の頭に一つの疑惑が浮かんだ。

「あなた、勝てなかったから拗ねてる、なんてことないわね？」

今度は相手が黙る番だった。

やっぱりそうだ。

疑惑が確信に変わった。

わざとらしく呆れたような溜息を吐いて言う。

「はあ。子供じやないんだから、手助けくらいしてあげればいいじゃない。あなたのことだから、どうせ切り札があるんでしょ？」

「……………ないわよ、そんなもの」

否定にも力がない。

というか、そもそも「拗ねている」ことを否定すらしていない。

チャンスだ。

戦車道で鍛えた勘がそう言った。

勢いに乗って言葉を重ねる。

「嘘ね。聞いたわよ？ 黒森峰との試合前に『大洗が廃校になる』って情報を流したんですってね。あなたが汚い策を使うときは、そういう評判をひっくり返す準備ができた時だけよ」

「……」

「大洗の廃校を止められる切り札がある。だから心置きなく盤外戦術を使ったのよ。ね？ そうでしょう？」

証拠はなかった。

ほとんど勢いで喋っているだけだ。

でも、間違っているとも思えなかった。

その証拠に、相手は先ほどとは一転して黙り込んでいた。

やつと受話器から声が聞こえるまでは、かなりの間があった。

「……あなたはいいいわよね」

心底うらやむような声だ。

聞き返すと、今度は拗ねた子供のような声が聞こえてくる。

「だって、もう一度勝っているのだから」

すぐに前回大会のことを言っているのだとわかった。

でも、そう言われるのは心外だ。

あの勝ちには、勝ちと言ってもマグレのようなものだ。

それで、こう言ってしまった。

「あんなの運がよかつただけよ。私はアレで勝ったとは思ってないわ」

それが失敗だった。

どうやら相手の気に障ったらしかった。

「はあ?」

という、聞いたこともないような低い声が聞こえてきた。

やってしまった。

弁解しようと口を開く前に、受話器から声が聞こえてくる。

「とにかく、私はこれ以上、大洗に関わる気はないわ。もし私の力が欲しいなら、まほさ

んが直接、頭を下げるべきだと思わない?」

「そんなに意地張らなくてもいいじゃない」

「意地なんて張ってないわ」

「張ってるわよ。まるで子供ね」

「張つてないわ。これが筋というものよ」

「なにが筋よ。三枚舌で有名な聖グロの隊長とは思えない言葉ね」

「……」

「あ、ちよつと、ダージリン。切らないですよ。ちよつと！ 子供じゃないんだから！」
ガチャツと音がした。

もうどれだけ声を張り上げても答えは返つてこなかった。

「交渉は失敗ですか」

それまで後ろで静かに控えていた副隊長が言う。

彼女もどこかに連絡していたらしい。

ちよつと携帯電話をしまっているところだった。

その副隊長に、プラウダ高校の隊長は「まったく、世話が焼けるんだから！」と強く
言つて向き直る。

「ノンナ！ 行くわよ！」

「はい、へりは屋上に準備しています」

数時間後、聖グロリアーナの隊長の不機嫌な顔が二人を出迎えた。

Side 砲手7

みほが内向的になりはじめたのは小学校の高学年に上がるくらいだった。理由は明白だ。

西住流の本格的な練習がはじまったからだ。

西住流は力と統制を重んじる流派だ。

弱者を切り捨てるとまでは言わないが、寄り添う流派ではない。

だけど、みほは運動会の競走中に友達が転んだら助けに戻ってしまうようなところがあった。

発想力の豊かさも、自由さも、西住流の範疇を超えていた。

上意下達の西住流では邪魔になるレベルで。

みほの目から見た西住流は、冷たくて不自由なものだっただろう。

私がそう思っていたくらいだから、まほや師範は一層感じとっていたはずだ。

これでどうしても西住流に馴染めないというなら、師範も無理強いはしなかっただろう。

ところが、みほには才能があった。

西住流の教えを実践すること自体は簡単にできてしまうほどの才能が。

それで師範も余計に、みほを西住流の型にはめようとした。

みほは器用に自分に合わない型にはまっていたが、苦痛を感じずにはいられなかったのだろう。

あれだけ元気に私たちを振り回していたみほが笑顔を見せなくなっていた。

私とメイに、まほが深刻な顔で相談してきたのは、そんな時期の、戦車の資料集めで本屋に出かけたときだった。

「みほを元気づけてやりたいんだが、何かいい方法はないか？」

みほは私にとっても小さいときから振り回してくれた妹のようなものだ。

何とかしてやりたいくて、ない知恵をしぼって

「相談できる親しみやすい人でもいたら変わってくるんじゃないか」

という結論をだした。

みほの周りにいるのは西住流戦車道という、近寄りがたい真面目人間を輩出する流派の人間ばかりだ。

気安く相談できる環境ではない。

そういう人間がいてくれたら、かなり状況はよくなるはずだった。

が、問題は

「そんな人間がどこにいるんだ」

ということにあった。

みほの交流関係をとやかく言ったが、私たちだって似たようなものだった。

学校での人間関係が上手くいっていなかったわけじゃないが、西住流戦車道の有力選手というと、みんな一歩引いてしまうのだ。

跡取りであるまほは言ってしまうえば浮いた存在だったし、まほと一緒の戦車に乗っているだけの私でも、教師にすら距離を置かれていた。

気軽に相談できる人。

言うのは簡単だが、そんな人間はどこにもいなかった。

このときの私はまだ気が荒くて気に入らないことがあつたら場所も相手も関係なく手が出る奴だったし、メイは今と変わらず 戦車の操縦以外は何もできないという奴だ。

まほにしても戦車戦はともかくとして、こういう問題になると西住流正面突破しかできない能無しだ。

揃いも揃って、この手のことが苦手な人間が集まっている。

それに加えて、みほの方も私たちに遠慮するようになってきていた。

「お姉ちゃんたちは頑張ってるのに、迷惑はかけられません」

という言葉葉を、いつだったか本人から聞いたことがある。

「仕方がない」

おもむろに、まほが『誰でもできるコミュニケーション術』という本に手を伸ばして言った。

「こうなったら、姉である私がそういう人間になるしかないだろう」

本をレジに持っていくまほの顔は『ザ・西住流』の堅物な真面目人間そのものだった。
(ああ、こりやダメだな)

そう思いながら別れた。

次の日の学校で、まほは死人のような顔をして

「『おねえちゃん、大丈夫?』と言われてしまった……」

そう言った。

西住まほは、そういう姉だった。

そんなことはよく知っているはずだった。

そういうまほだから私が守ってやらなければいけなかったのに、逆に責めて苦しめてしまったのだ。

私さまほを殴った次の日には、いつも通りのような顔をして学校に来ていたが、本調

子でないのは明らかだった。

話しかけられても上の空だったし、指示も見当違いなことが多くて、一年生ですら異変に気付くほど練習に身が入っていなかった。

そう言う状態だったから、聖グロ戦前から生まれたまほに対する反発は一層大きくなった。

全体練習は形にすらならなかった。

何とかしたかったし、何とかしなければならなかった。

でも、どうしていいかわからない。

普段なら、どうしようもないときは師範を頼れば何とかだったが、今回は事情が違う。

最近の師範は、みほのことを口に出すと、それだけで怒りを顕わにした。

大洗のことに關しては師範が一番冷静じゃなかった。

とても協力は望めない。

そして私もまほも、文科省を動かさせるような知り合いを他に持っていない。

もうお手上げだった。

ダーズリンから電話がかかってきたのは、そんなときだった。

どうしてこの時期に？

まほは怪訝な顔をしながら電話に出た。

「こんな格言を知ってる？」

ダージリンはいきなり言った。

「友情は瞬間が咲かせる花であり、時間が実らせる果実である……あなた達には、そういう友人がたくさんいるのではないかしら？」

その言葉が終わると、電話も切れた。

私たちは顔を見合わせた。

それからうなぎき合って、戦車道をやってきて、これまで戦ってきたライバル校に電話をかけ始めた。

戦車道の試合では試合開始前に地形を調査する。

もちろん事前に地形図は見るのだが、それだけだと実際の状況と食い違ふところが多く出てくる。

たとえば前日に雨が降っていたりしたら、地面がぬかるんで戦車を動かしくくなっていたりするが、そういう情報は地形図には載っていない。

そういう情報を知っているか否かが勝敗をわける。

この調査は欠かすことができない。

「HEY！ まほ！」

ケイがやってきたのは、そんなときだった。

強豪校の一回戦敗退ということで、かなり叩かれたはずだが、そんなことは全く感じられない明るい笑顔を浮かべていた。

「ケイ、お前は……」

「アツハハ！ さすがまほの妹ね、してやられたわ」

バン、バンとまほの肩を叩く手も元気そのものだ。

見ているこつちまで元気になってくる。

ケイはもう二、三回叩くと手を止めて、今度は真面目な顔になって言った。

「大洗の廃校のこと、聞いたわ」

驚きからか、まほの目が大きく開かれた。

さらに言う。

「サンダース大付属高校が全力を挙げて、文科省に抗議する。決勝まで進出した強いチームを廃校だなんて考えられないもの」

抱きしめられながら、まほはまだ信じられないようだった。

でも解放されると、正気にもどったように「……ありがとう。ケイ」と、戸惑いの残る口調で言った。

「困ったときはお互い様でしょ！ それより試合、頑張つてね！」

ケイは片目をパチリと閉じて親指を立てると、背中を見せて立ち去った。会うたびに思うが、本当にいい奴だ。

次にやってきたのは意外にもカチューシャだった。

いつもどおりの不機嫌そうな顔をして、ノンナに肩車されてやってきた。

「カチューシャ……」

まほも意外に思ったのだろう。

心持ち目を見張っていた。

カチューシャは、そんなまほを見下ろしながら言った。

「まずは決勝進出おめでとう、と言っておいてあげるわ」

これまた意外な言葉だ。

試合前にあいさつに来たことすら意外だったので、じゃあ嫌味でも言いに来たのだろうと思っていた。

「……」

しかし、カチューシャはここで黙り込んでしまった。

まほが礼を言うのと、ふん、とそっぽを向いてしまった。

何をしに来たのか。

質問するような気持でノンナに視線を向けると、彼女はちよつと微笑んで口の動きだけで

『ちよつと待つてあげてくれますか』

と言ってきた。

カチューシャに視線を戻すと、うつすらと顔が赤くなっているのがわかった。

「……………きよう……………あげるわ」

しばらく経ったあと、やっとカチューシャは蚊の鳴くような声で言った。

よく聞き取れなかった。

まほもそうだったらしい。

聞き返した。

すると、カチューシャは大きく息を吸って、今度は誰にでも聞こえるようなはつきりした声で言った。

「大洗女子の廃校のことよ！ プラウダも一緒に抗議してあげるって言ってるの！」

まほが大きく目を見開いた。

一応プラウダにも声はかけていたが、学校の性格が閉鎖的だし、カチューシャは気難しい性格で有名だ。

こう言うことに協力してくれるとは思っていなかった。

どういふ風の吹き回しで、と疑問に思っていると、カチューシャは言い訳するような口調で説明してくれた。

「だって、仕方ないじゃない……プラウダに勝った大洗が『何の活動もしていない』なんて理由で廃校にされたら私たちの立場が……」

それで納得できた。

そういう大義名分があるならカチューシャの性格から考えても動くはずだ。

まほが言った。

「優しい奴だと思っていたが、私の目に狂いはなかったようだ」

「や……!?! そんなことあるわけないでしょ! 大洗は冬季大会でプラウダが倒すの!

そのために助けるのよ! わかった!?!」

「わかってる」

「本当にわかったんでしようね? いい? 別に手を貸したくて手を貸すんじゃないの。大洗が勝って廃校が撤回されるのが一番なのよ。そうしたら黒森峰よりプラウ

ダの方が上つてこともハッキリするんだから! ノンナ!」

「はい」

ノンナが頭だけで礼をして、踵を返した。

その背中を、まほの「カチューシャ！　ありがとう！」という言葉が追いかけた。ちよつとだけふり返ったその顔は、また赤く染まっていた。

「西住隊長殿！　決勝進出おめでとうございます！」

知波単学園特有のビシツと決まった敬礼をしながら元気な声で言ってきた、その生徒とは話したことがなかった。

だが、見覚えはあった。

正直に言つて、知波単学園と戦つて負けるとは思はず、それだけに情報を真剣に聞いていなかったたので記憶が曖昧だが、一回戦がはじまる前に調べた隊員のプロフィールの中に、この顔があつたのは間違いない。

二年生の車長だつたと思うが、何という名前だつたか。

西、までは覚えてる。

下の名前が思い出せない。

私が名前を思い出そうしていると、まほが言った。

「西絹代さんだな。二年生の」

そうだ、絹代だ。

私が感心していると、西絹代も同じ感想を持ったようだった。パツと笑みを浮かべて

「私のような若輩者を覚えていてくださいましたか！」と明るい声で言った。

知波単学園は千葉県に母港をもつ、いわゆるお嬢様学校だ。

そのOB、父母会には国の高級官僚や政治家なども多数いる。

そういう学校だけに文科省の影響も強い。

だから、この学校から協力を得るのは難しいと思っていたのだが、西絹代はそんな私の懸念を吹き飛ばすように、大きな声で言った。

「大洗の廃校への抗議のことはお任せください！ 知波単学園一億総玉砕の覚悟を持って断固抗議いたします！ こちらの署名です」

西は一緒に来ていた知波単の隊員をうながすと、彼女が持っていた旅行鞆からドサ、ドサ、ドサ、と三回に分けて書類を出して見せた。

見てみると言葉の通り大洗廃校への抗議を訴える署名だ。

百枚、二百枚ではない。

千でもきかないかもしれない。

「戦車道履修生をはじめとした全校生徒、教員、OB、父母会、おおむね署名してくれました。お役に立てれば嬉しいのですが……」

西はつましくそう言ったが、役に立つなんてものじゃない。

知波単学園のOB、父母会がこんな署名をしてきているなら、文科省はかなり動きにくくなるはずだった。

まほが西の手を取っていった。

「ありがとう。君と知波単学園のおかげで妹を助けられるかもしれない」

答える西は、なかなか堂に入ったものだった。

「このような横暴は決して許されることはありません。これは依頼があつたからというより知波単魂の問題です。知波単魂にかけて大洗は守り抜いて見せます」

夏の大会の一回戦で敗退して、責任を取らされるという名目で三年生が引退するというのが知波単の伝統芸能だが、次の隊長は彼女になるのかもしれない。

隊長ではなく、西がここにやってきたのもその含みがあるからか。

まほがもう一度「ありがとう」と言うと、西は敬礼と「西住隊長も決勝戦頑張ってください！」という言葉を残して去っていった。

Side 砲手8

しばらくすると、また意外な奴がテロレロレーンとカンテレを弾きながらやってきた。

「やあ、西住さん。こんには」

継続のミカだ。

大洗の件で連絡しようとしたとき、各校の隊長の中で唯一連絡がつかなかったのがコイツだった。

話を聞いてみると

「ミカなら二回戦が終わったあと、旅に出ちやいました」

ということだったので、電話に出てくれた生徒に用件だけ伝えておいたのだ。

それが三日前から大洗のことをまだ知らないはずだった。

ところが、ミカはいきなり懐から何枚かの紙を取り出して、まほに渡した。

どの紙の頭にも「島田流門下」という字が踊っていて、その下に「大洗女子学園廃校に対する抗議文書」と書かれている。

島田流出身で社会的な地位のある名前が多い。

西住流と敵対するはずの島田流まで大洗の廃校に反対となれば、文科省はさらに動きにくくなるはずだ。

「これは？」

「見ての通りだよ。こういうのは多い方がいいだろう？」

意外すぎる。

コイツに島田流門下とのつながりがあったことも意外だが、こういうことで動いてくれるのも意外だ。

今日は本当に驚かされることばかりだ。

「ありがとう、ミカ」

「そういう風が吹いただけさ。礼には及ばないよ」

テロレロレオンと、もう一度カントレを弾きながらしてミカは去っていった。

その背中と、また一人新しい顔がすれ違って、こちらに近づいてきた。

「ごきげんよう、まほさん」

「ダージリン……」

アッサムもオレンジペコという装填手の一年生もいない。

珍しく一人で、聖グロの校章が描かれたクリアファイルを脇に挟んでやってきた。

「これが何か、わかりますか？」

ダージリンはまほの前に立つと、挨拶もそこそこにそう言つてクリアファイルを開き、中に入っていた紙をまほの前でヒラヒラと遊ばせた。

目を凝らしてみると、

BC自由

豎琴

苦小牧メイプル

ケバブハイスクール

継続

新潟ビゲン

奈良グレゴール

呉西グローナ

ワツフル

青師団

マジノ

ヴァイキング

伯爵

といった、戦車道をしているほとんど全ての高校から送られた「全生徒から大洗廃校

を抗議する旨の署名を集めた」という報告書だった。

どの書類にも、各校の代表者の署名がしっかりと記されている。

本物だ。

「いつの間に、こんなものを……」

まほが私も思っていたことを言った。

本当にそうだ。

いつから動いていたらこんなものを集めることができたのか。

ダージリンは何でもないことのように言った。

「大洗の角谷さんから連絡があったのが抽選会の直後ですから、その後ということになりますね」

とすると、だいたい一カ月の猶予があったことになる。

いや、それにしても早い。

さすがは高校戦車道において情報戦最強を誇る、聖グロのスパイ機関と言ったところか。

「ダージリン、本当にありがとう……!」

感極まった様子でまほが立ち上がり、書類を受け取ろうと手を出したが。

それをダージリンはひらりと躲してしまった。

「……どういうことだ？」

隣で聞いていて身構えてしまう。

ダージリンの交渉上手は有名だ。

そしてこの書類は、まほにとつて本当に喉から手が出かぬないほど欲しいものだ。

ただでさえ交渉上手と言われるダージリンがそういう交渉材料を持っているのだから、よほどの条件を出されると考えないといけなだろう。

眼を鋭くして、まほが聞く。

その視線も優雅な笑みで避けて、ダージリンは関係なさそうなことを言いはじめた。

「アツサムのことなのだけれど、実は彼女、黒森峰の試合があつてから『悔しくて、悔しくて、夜も眠れない』と言っているんです」

まほが不審そうに目を細めて問い返す。

「同情するが、それがどうしたんだ？」

ダージリンは答えずに続けた。

「だって、そうよね？ アツサムはG I 6の一員として、各校から署名を集めるといふ本来関係のない仕事を増やされたんですもの。『もし、それがなければ勝てたかも』と考えて悔しがるのは当然のことだと思いませんか？」

まほが答える。

「まあ、そうだな」

ダージリンは畳みかけるように言葉を投げた。

「本人の努力不足なら私も何も言いませんけど、こういう致し方のないことで悔しい思いをするのは可哀想だと思いませんか？」

それで何をさせたいのか、なんとなく読めてきた。

だが、まほはまだ理解できてないようで「ダージリンの言う通りだと思うが……」と、これにも素直に答えた。

子供のころからこういう腹芸ができない奴なのだ。

さらに畳みかけてくる。

「ということ、条件があります」

「条件、だと？」

ダージリンがおもむろに制服のポケットから何かを取り出して、まほの顔の前に突き出した。

一瞬、携帯電話かと思ったが、よく見ると違う。

ボイスレコーダーだ。

電源を入れたのか、ピロリロリンという音が聞こえてきた。

「ときに、まほさん？ 今日は何年の、何月、何日で、何時くらいかしら？」

不審そうな顔でダージリンを見つめながら、まほは素直に答えた。

時計を見て確認したが正確な回答だった。

「それでまほさん、貴女は私たち聖グロリアーナ戦で窮地に追い込まれたわ。ここにいる高松さんが咄嗟に指示を出さなければ、私たちの砲撃はティーガーの装甲を貫通していた。そうよね？」

「……ああ、間違いはない。レンがいなければ負けていたのは私たちだった」

「もしアツサムが大洗の件を放置して黒森峰の情報収集に集中していたら、貴女のティーガーが高松レンさんを中心にああいう動きもできると考慮して動いていた。そうよね？」

「……アツサムほどの砲手なら、そのくらいのことにはやっただろうな」

そこまで言ってやっと、まほはダージリンの意図に気付いたようだった。

見たこともないような苦笑いが口の端に浮かんだ。

だが、もうどうしようもない。

書類を手に入れるには、このままダージリンの掌の上にいるしかないのはわかりきっている。

「もし私たち聖グロリアーナ女学院が貴女の妹を助けることに力を裂かなければ、勝つ

ていたのは聖グロリアーナ女学院だった。西住まほがそう考えているということ、いいのね？」

「……………その可能性は、高かっただろうな」

それを聞くと、ダージリンはグイツとボイスレコーダーを一層前に突き出して言った。

「感謝の言葉をいただいてよろしいかしら？」

さすがに葛藤があったようだ。

勝って驕るのとは無縁だが、勝者のプライドとはちやんと持っているのが、まほだ。

チラツとダージリンが持つている書類に目をやって、それからダージリンと見つめ合って、その表情がいつまでも変わらないのを確認すると、私に視線を向けてきた。

私も勝つたのに頭を下げさせられるのには腹が立たないでもない。

上手く躲すように伝えようか。

そう思いもしたが、やめた。

書類はどうしても手に入れなければいけないし、まほが口でダージリンに勝てると思えない。

うなずいてやった。

それから少し間があつて、まほは言った。

「……参った。聖グロリアーナが黒森峰を倒すことに集中していたら、私は負けていただろう。自校の都合を顧みず、大洗女子を助けようとするその姿勢には感服した。聖グロに、とくにダージリンとアッサムには本当に感謝している。もう一度言うが、私の負けた。本当にありがとう」

まほが頭を下げたあと、ダージリンはボイスレコーダーの電源を切り

「ええ、どういたしまして。アッサムはじめとして、うちの生徒たちにはこの言葉をよく聞かせておくわ」

こう言つて書類をまほに差し出した。

このときのダージリンの顔は、たぶん生涯忘れないだろう。

花の咲くような、綺麗な笑顔だった。

試合の時間が近くなつて、そろそろ作戦会議に移動しなければという時間になつたとき、まほが言つた。

「そう言えば安齋が来ないな」

実をいうと、私も気になつていた。

サンダース、プラウダ、知波単、聖グロと聖グロが持つてきた書類に署名してくれた学校の他に、戦車道をやっている高校はアンツイオとヨーグルト学園くらいだ。

ヨーグルトは島田流の影響が強いから西住みほを助けるようなことはしないというのはわかる。

だが、アンツイオは絶対に来てくれるものと思っていた。

隊長の安斎は、中学時代には中部地方で名を馳せた名選手だった。

そのときから顔見知りで信用できる性格なのも知っていたからだ。

大洗の件を電話で伝えたときも

『なにい!? 大洗が廃校!? そのために署名を集めろ? わかった! アンツイオの生

徒だけじゃなく、うちに見学にくる人たちからも集めてみるからな! 待ってる!』

と言ってくれていた。

言ってしまうえば、他の学校が来てくれなくとも、アンツイオは来てくれるとさえ思っていた。

「アンツイオは財政難でこの大会まで試合にも出れなかつたくらいだ。忙しくて署名を集められなかつたってことじゃないか」

「まあ、そうかもしれないが」

しかし、移動する途中でアンツイオ高校とも会った。

といつても、一方的に私たちが顔を見ただけだから会ったというのは違いかもしいが。

「……よく寝てるな」

「……そうだな」

ノリと勢いとパスタのアンツイオ高校と言えば戦車道外でも有名だが、隊長の安齋まで一緒になって眠っている。

中学のときはしつかりした奴だったのだが、アンツイオに染まってしまったのだろうか。

まあ、でも安心した。

「こんなにぐっすり寝てるってことは、ちゃんと約束は守ってくれたんだな」

「そうみたいだな」

「どうする？ 起こしてやるか？」

私が聞くと、まほはちよつと考えて

「いや、寝かせおいてやろう。試合が始まるころには起きてくるだろう」

たしかにここまで気持ちよさそうに寝ていると起こすのも可哀想だ。

私たちは安齋たちとも別れて移動を再開した。

まあ、何にせよ。

20校ほどの学校が大洗の廃校に反対だという言質を取れたことになる。

これなら絶対に止められるという確信はないまでも、文科省の大洗廃校に対して十分

な抗議ができる。

私たちが勝つても、大洗が廃校にならないかもしれない。

「かもしれない」だけだが、それでも十分なようだった。

「でも、ケイや安斎、知波単は性格からそうだろうとは思いうし、ミカは気まぐれだろうけど、なんでカチューシャやダージリンは協力してくれたんだらうな？」

私のつぶやきに、まほが答えた。

最近見ることがなくなっていた、あの頼もしい西住隊長の表情で。

「無様な試合はするなということだろう。なかなか手厳しい激励だが、もっともな意見だ」

そんな話をしながら、まほと一緒に黒森峰が拠点としている大型テントに戻ると、なんとなく騒がしくなっているのに気付いた。

中に入ってみると、黒森峰の隊員たちが作戦会議に使う机を遠巻きにして、中心にあるらしい何かを見つめていた。

「アカネ、どうしたんだ？」

「あ、隊長、レンさん。あの人です」

ちょうど近くにいたので聞いてみると、アカネは小声でそう言って、みんなの視線の中心を指さした。

見ると、大洗の制服を着た女が座っている。

カチューシャほどではないが、中学生くらいには見えるほど小柄だ。

しかし、その体に似合わず度胸は据わっているらしい。

黒森峰隊員たちの複雑な視線もどこ吹く風で、ツインテールにした髪をゆつくりと揺らしながら茶をすすっていた。

「角谷さん、だな」

まほが呼びかけると、角谷杏は首を動かしてまほを見て、ニツと人懐こそうな笑顔を浮かべ、長年の友人にでもするように「やあ」と気安く片手をあげて

「西住ちゃんのお姉ちゃんだね。改めまして私は角谷杏。大洗の生徒会長だよ、よろしくねー」

と軽い調子で言って、またニツと笑った。

それから立ち上がったまほの手を握る。

こういう相手の懐に飛び込んでしまうようなタイプは、私たちの周りにはいないタイプだ。

こういう人間の下でなら、みほは力を発揮できそうだと思った。

まほの表情に一瞬だけ影が浮かんだ。

それを柔らかい笑みで打ち消すのも横目に見えた。

「いい試合にしよう」

まほはそう言つて、手を差し出した。

角谷杏が帰り、試合前の最終ミーティングが終わつたころには、もう試合の時間になつていた。

「両校隊長、副隊長、整列！」

審判団の指示で、まほとエリカが黒森峰の隊列から踏み出した。

大洗の列からも、よく見知つた顔が出てくる。

黒森峰に対する負い目があるからか、どこかオドオドとしていた。

試合の映像を見て、ずいぶん変わったようだと思つていたが、戦車に乗つていないと頼りないのは変わつていないようだ。

「……」

相対して、まほが何か言つたようだった。

その瞬間、まほの表情が引き締まる。

励ましの言葉でもかけたのかもしれない。

戻ってくる、私たちに言った。

「ついに決勝だ、大洗の廃校のことで悩んでいる者もいるだろう。キミたちには辛い思いをさせたと思う。だが、今日、各校の隊長からこのことについて断固抗議するという声明をもらうことができた。私もみほが傷つかないように動くつもりだ。だから今は目の前の試合に集中してほしい」

「全員、搭乗せよ」

その一言で黒森峰の列が解体されて、一斉に各自の戦車に向かって駆け出す。

私もティーガーIに乗り込んだ。

すこしして入ってきた、まほが聞いてきた。

「みんな迷惑をかけた。こんな隊長ですまないが、黒森峰の伝統と西住流の名にかけて、この試合は負けるわけにはいかない……協力してくれるか？」

それにメイとユリとアカネが、それぞれ答えた。

「勝ちましょう！」

「当たり前です」

「当然」

私も答える。

「当たり前だ、勝つぞ！」

Side クラスメイト8

私が到着したとき、会場にはまだ誰の姿もなかった。

何せ、試合には三時間も早いのだ。

それも当然だろう。

そう思っていたのだけど、しばらくすると私以外の観客もやってきた。

その人の顔を見たとき、私は顔をしかめずにはいられなかった。

彼女たちは、いわゆる

『西住まほファンクラブ』

のメンバーだったのだ。

学校のいたるところで集まっては、まほの噂話を愉しんでいる人たちだ。

正直に言えば、あまり好きではなかった。

戦車道のことを勉強していたら話しかけてきたので何度か話す機会があったけど、話も合わなかった。

彼女たちの言う『西住まほ』と、私の知っている『西住まほ』は違い過ぎていたから。

「……」

「……」

でも、話が合わないと思っていたのは彼女たちも同じだったようだ。

目が合うと、彼女たちは私からかなり離れた席に腰を下ろした。

気まずい雰囲気だが、それでも近くに座るよりは気楽だった。

一時間ほど気まずさに耐えていると、また気の早い観客が一人やってきた。

前田メグミさん。

いつもまほにカレーを作っている栄養科の生徒が、ボストンバッグのような大荷物を抱えて現れた。

「あ、茅野さん、久しぶり」

私を見ると、気さくに手を振ってきて、隣の席に座った。

前田さんのことは嫌いじゃない。

私も話しかけた。

「前田さんが試合を見に来るなんて、めずらしくないですか？」

「まあね、いつもは食堂の仕事があるから来れないんだけど、今日はちよつと心配でさ」

そういう前田さんの気持ちは、よくわかった。

私も同じ気持ちだった。

いつもはもつと遅い時間に来るのだ。

相槌を打つと前田さんは「あ、やっぱり？」と苦笑いした。

「笑っちゃうよね、お前はオカンかって」

これも全くもって同意見だった。

でも、悪いのは私たちじゃない。

心配させるまほが悪いのだ。

そう言うのと、前田さんは笑いながら何度もうなずいた。

「茅野さんは、みほちゃんと会ったことあるんだっけ」

笑い終わると、前田さんは言った。

首を横に振る。

大洗の試合の映像を見ても『うちにこんな生徒がいたんだ』と変に感心したくらいだから、偶然どこかで話したということすらないはずだ。

「じゃあ、知らないよね。私は中等部のころからみほちゃんのこと知ってたんだけど、ずっと暗い顔してる子でさ、私も『この子にはこの学校が合ってないんじゃないか』って思ってた」

前田さんの表情がいつの間にか暗くなっている。

「西住さん、そういうみほちゃんを何度か食堂に連れて来てたんだけど、見てるのが辛い

みたいだった。あの姉妹ってパツと見ただけで仲がいいのはわかるんだけど、なんだか話が弾まないんだよね。みほちゃんと来るときは西住さんのカレーの減りも遅いの」
「……」

「そういうみほちゃんがさ。この大会の二回戦で勝ったとき、ニコって笑ってたじゃない？ あれ見ると『ああ、これは西住さんは辛いだろうな』って」

「それに加えてみほちゃんの学校が廃校になるって話でしょ。西住さんは各校の協力を得られることになったから問題ないって言ってたけど、あれ、嘘でしょ？ まあ、これで望みはつながるんだろうけど、問題ないなんて断言できるほど、文科省が融通利かないのは私でも知ってるよ」

その通りだった。

まほ自身、その話をするとき「賭けてみる」という表現を使っていた。

『勝てば西住流と黒森峰女学園の面目が立つ。けど、妹の居場所がなくなる』

『負ければ妹の居場所は守られる。けど、西住流と黒森峰女学園の面目は丸つぶれになる』

という危機は、まだまほの目の前にある。

「まっ、というわけでさー！」

前田さんは、暗くなってしまうた雰囲気吹き飛ばすように明るい声で言って、持つ

てきていた大荷物を開けた。

中から新鮮な土の匂いがふわっと漂ってきた。

覗いてみると、ニンジン、ジャガイモ、タマネギと何を作るのか一目でわかる食材が見えた。

「試合が終わったら作ってあげようと思つて持つてきちゃつた。茅野さんもどう？」
井手上メイさんがやってきたのは、それからすぐのことだ。

「茅野ユウ、話がある」

メイさんはそう言うと、有無を言わずに私を立たせて、そのまま戦車戦のフィールド内に入ってしまった。

どうやら試合前の地形視察をしているところだったらしい。

「まほのことだけど」

かなり観客席から離れて人目がなくなつたとき、メイさんは言った。

「もし今日の試合で負けたら、まほは世間から凄く叩かれると思う。それでも、まほの友達でいてくれる？」

「この質問に答えるのに、もうためらいは要らなかつた。

「もちろんだよ」

と私は答えた。

「そう、ありがとう」

メイさんの話は終わりらしかった。

それだけ言うと、クルツと方向転換して来た道に戻りはじめた。

でも、これで終わりという風にはならなかった。

正面から大洗のパンツアージャケットを着た5人組が歩いてきたのだ。

彼女たちは私たちに気付くと、それぞれに大きなりアクションをした。

ちよつとムチつとした体形の子と、一番背が高く髪が長い子は他の三人を庇うように前に出てきた。

どこか猫のような雰囲気の小柄な子は眠そうな目をスツと鋭くした。

モジャツとした髪の子は、なにやら感動したような面持ちで目を見開いている。

そして、おっとりした感じの——でも、ハッキリとまほに似ている女の子は

「メイさん……」

と申し訳なさそうに私の横にいる人の名前を呼んだ。

西住みほという名前が、すぐ頭に浮かんだ。

「何の御用ですか」

髪の良い子が丁寧な口調で、しかし険のある声で言った。

それにムチつとした子と、小柄な子が同調する。

「そうだよ、またイチヤモンつけにきたの!」

「あの副隊長といい、黒森峰の生徒は人に絡むのが好きらしいな」

「あ、みんな……」

メイさんは困ったように、みほちゃんを見つめていた。

でも、そのみほちゃんが周りを止めようとしても、三人は納得しない。

どんどん雰囲気が悪くなっていった。

それを壊したのはモジヤツとした髪の子の、感極まった声だった。

「井手上メイ選手ですねっ!!」

そう叫ぶと駆け寄ってきて、メイさんの手を取った。

「あの井手上さんと会えるなんて光栄ですう! 戦車道をしていた甲斐がありましたっ

! あ、握手してもらっていいですか!」

「あ……ありがとう?」

その子の行動で大洗の生徒たちの雰囲気はゆるんだ。

「えっと、ゆかりん? その人のこと知ってるの?」

「何を言ってるんですか!? 西住まほ隊長が操るティーガーの乗員で、高校ナンバー1操縦手の呼び声も高い井手上メイ選手ですよ! もちろん同じ操縦手の冷泉殿なら

知っていますよね!？」

「すまん、知らん」

そこに髪の毛の長い子が

「あの……優花里さん？」

と呼び掛けて、みほちゃんの方に視線を向けた。

それで優花里と呼ばれた子も気付いたらしく、あわあわと口を震わせて肩を落とした。

何というか、犬に似ている。

ちよつとかわいそうだった。

まあ、けど、これでメイさんとみほちゃんが話せる環境になった。

「みほ、久しぶり」

メイさんがそう呼び掛けて微笑んだ。

「決勝進出おめでとう」

それを受けたみほちゃんの顔に、一瞬戸惑いが浮かんだ。

けど、すぐに笑顔に変わって言った。

「ありがとうございます」

「そつちの人たちはIV号の乗員だよね？」

「紹介しますね。通信手の武部沙織さん、砲手の五十鈴華さん、装填手の秋山優花里さん、操縦手の冷泉麻子さん」

みほちゃんが一人一人の名前を紹介していく。

終ると、メイさんはコクツとうなずいた。

「みんないい子なんだね」

「はい、私の友達です」

視線を移すと、IV号の乗員の四人が小声で話し合っている。

「なんだ、ずいぶん西住さんと親しいんだな」

「井手上選手は小学校から西住まほ隊長の戦車に乗っている方ですからね。そのときか

ら親交があるんじゃないでしょうか」

「さすがゆかりん、よく知ってるね」

「みほさんがこんなに笑ってるのは初めて見た気がします」

みんなみほちゃんのことを心配していたようだ。

メイさんの方に視線を戻す。

「……久しぶりにレンの鉄拳制裁が見れた」

「ふふっ、相変わらずなんですネ」

「うん、たしかにみほが転校した初めのうちは大変だったけど、もう立ち直ってる」

「西住、ここにいたか！」

向こうの方で声がした。

声が続いてゾロゾロと集団が走ってくる。

みんな大洗の隊員らしく、パンツァージャケットを着ていた。

口々に言う

「また黒森峰の連中か！」

「西住隊長を助ける！」

「まったく会長がいないうちに」

とかのセリフで、さっきまでのIV号の乗員と同じ勘違いをしているのがわかった。

思わず、笑ってしまう。

みほちゃんも、大洗でこんなに多くの人に慕われている。

「メイさん、まほがこれを見たら、嬉しいって思うのかな？」

「……」

「メイさん？」

答えが返ってこない。

見ると、私の隣にいたはずのメイさんの姿はもう数十メートルは離れたところにあつた。

逃げたんだ。

気付いても、もう遅かった。

私は大洗の生徒たちにスパイと間違われて、一時間ほど拘束された。

みほちゃんとIV号の乗員の言葉があつて解放されたが、観客席に戻ったときには席はほとんど埋まつてしまつていた。

前田さんの隣も他の人が座つていた。

ただ、例のファンクラブの隣の席だけが一つ空いている。

「……」

仕方がない。

戦車道の試合は長ければ5時間、6時間とかかることも珍しくない。

立ち見をするよりは、ましだった。

私はその責に腰を下ろして試合が始まるのを待つことにした。

あと十分ほどだったが、その十分は永遠にも感じられた。

その間、私はずっと悩んだ。

まほが勝てば大洗は廃校になる。

けど、負ければまほは今までの比ではないくらい傷つくことになる。

けど、それは勝つて、みほちゃんが一人になつてしまつても同じことが言えて……

(ああ、もう！ どうしたらいいの！)

頭の中がめちやくちやで破裂しそうだった。

私がいくら悩んだって結果は変わらないとわかっていたけど、悩まずにはいられなかった。

『試合開始！』

審判の宣言が聞こえた。

両校の戦車が一気に動き出した。

序盤、いきなり奇襲を成功させたのを見たときは勝ったと思ったものだ。

はじまる前から戦力差は歴然としていたし、装甲や火力なんかの戦車の性能も圧倒していた。

そもそも数が相手の2.5倍だ。

でも黒森峰はここで1両しか倒せなかった。

明らかに隊内の動揺の結果だ。

みほちゃんの学校が廃校になるかもしれないという不安。

隊長に対する不信。

そういうものが濃く残っていることを顕わしていた。

大洗が高地に作った陣地を攻めた戦いでも、それは顕われた。背後に現れたヘツツアーの攻撃に黒森峰は情けなくなるほど崩れた。つた。せつかく包囲していた大洗の戦車も簡単に逃がしてしまった。

ここまで黒森峰は3両を撃破されている。

対して大洗は1両だけ。

観客席の楽勝ムードは消えてなくなっていた。

「だ、だいいじょうぶだよね？」

となりのファンクラブの子が狼狽した様子でそんなことを言っていた。

大洗は得意とする市街地に入っている。

お世辞にも「だいいじょうぶ」と言える状態ではない。

まほが市街地に潜ませていた超重戦車マウスも、大洗の奇天烈な作戦で撃破されてしまった。

「負け」

という言葉が現実味をもって迫ってきた。

だからだろうか。

そのときには、あれだけ悩んでいたのが不思議なほどハッキリと

(負けて欲しくない)

と思っていた。

勝て、勝て、勝て、と自然と念じていた。

大洗の廃校？

みほちゃんの居場所？

学園艦に乗っている人たちの人生？

うるさい死ね。

それだけの理由で、まほが負けていいわけあるか。

だって、あんなに頑張っていたのだ。

夜遅くまで学校に残って戦車道の仕事をしていたし、休みの日にも戦術の勉強をして
いた。

みんなの模範にならなければいけないと言って、学業も頑張っていた。

周囲からの期待というプレッシャーにも耐えてきた。

妹が苦しんでいるのに何もできないという状況にも耐えてきた。

これで勝てないなんて言ったら、おかしいじゃないか。

「あ、あの、茅野さん？」

ファンクラブの子が話しかけてきた。

わずらわしくて顔をスクリーンに向けたまま「なに」と聞いた。

「あの、手を、離してほしいなって……」

それでやっと、その子の手を握りしめていたことに気付いて、慌てて手を離した。

「ご、ごめんね！　いつから……」

「い、いいよ、マウスが倒されたときくらいからだから、そんなに時間たってないし」

10分は前のことだった。

手が汗でびっしょりと濡れていたのが恥ずかしかった。

「本当にごめんね」

「大丈夫だよ私も気持ちにはわかるから」

話している最中に砲撃の音がした。

私と彼女は同時にスクリーンに視線を映した。

撃破されている車両はない。

それを確認すると、思わずため息が出てしまう。

となりの子も同じことをしているのが横目に見えた。

たしかに気持ちはわかるのかもしれない。

試合は進んでいく。

まほの率いる本隊が市街地に着いた。

大洗は各車両がバラバラに逃げることで黒森峰の戦力を分散させると、ついに廃校の

敷地内でみほちゃんのIV号と、まほのティーガーIの一騎打ちになった。

不意に左手が引つ張られる感覚があった。

さっきのファンクラブの子が私の手を握っていた。

「あつ、ごめんなさい……」

「いいよ、気持ちわかるから」

「アハハ……」

またスクリーンに視線を戻すと、そこではキューポラから顔を出した二人が映されていた。

まほは普段通りの——すくなくとも表面上は——凛々しい表情で、相手をまつすぐに見て言った。

「西住流に逃げるといふ道はない。ここで決着をつけるしかない」

対する相手は、まほとは対照的に気弱そうな——なのにとどこかまほと似ている——表情を引き締めて言った。

「……受けて立ちます」

二両の戦車が同時に動き出す。

現場に設置されているマイクが拾うエンジン音がけたたましく会場に響いた。

その振動のせい、スクリーンの映像も大きく揺れた。

会場全体が、この二人の一騎打ちに全神経を集中していた。

(メイさん、ユリさん、レンさん、神様。どうかまほを勝たせてあげて)
だから私の眩きは、たぶん誰にも聞かれなかつたはずだ。

Side 砲手9

照準から久しぶりに生のみほの顔を見たとき、いろいろな感情が胸の奥から湧き上がってきたのを感じた。

いい表情が出来るようになったんだな。

——なんで戦車道から逃げたはずのお前が私たちの前に立つてるんだ。

心配してたけど、安心したよ。

——お前のせいで、まほがどれだけ苦しんだか、わかってるのか。

いい感情が半分、悪い感情が半分。

正反対の感情は私をかき乱した。

指先のコンマ数ミリの動きが勝敗を決する砲手にとって、決している状態ではない。

でも、どうにもならなかった。

この気持ちを全部、直接言つてやらなければ、どんなことがあつても平常心にはなれないような気さえした。

不意に、まほが私の肩に手を置いた。

それだけだったが、私の中で渦を巻いていた感情は嘘のように静まった。

(まったく、シスコンめ)

手を置かれた肩をぐるりと回すようにして振り払う。

はたから見ると邪険に扱ったように見えただろうが、これで伝わったはずだ。その証拠に、すぐに指示が来た。

「パンツァーフオー！」

メイが戦車を動かす。

私もアカネと領きを交わして、みほのIV号に向けて砲塔を旋回させた。

「撃てー！」

引き金を引く。

IV号は弾の動きを知っていたように綺麗に避けると、逆に打ち返してきた。

メイがティーガーを超進地旋回させて避ける。

IV号は廃校舎の入り組んだところに入って行った。

正面から戦えば不利だと判断したのだろう。

いい判断だ。

「追う」

「頼む」

角を曲がると、IV号は次の角を曲がるところだった。

照準が間に合わない。

さらに追うが、次の角でも同じようにIV号は背中をチラリと見せただけで視界から消えた。

「地図によると、この次の角は待ち伏せに最適です」

「そうか」

ユリの言葉を受けて、まほが一瞬考え込んだ。

「じゃあ、レン、頼めるか？」

「はいよ。アカネ、榴弾だ」

「はい！」

装填が終わったのを待って、撃つ。

校舎を、だ。

狙い通りに校舎の一部が崩れ、大量の砂礫がバラバラと落ちて来た。

土煙もたつて、視界はかなり悪くなった。

この中なら狙い撃ちは不可能に近い。

が、通るだけなら通れないことはない。

「メイ！」

「……」

視界が悪い中、フルスロットルで角を曲がる。

しかし、砂礫を突っ切って抜けると、またしてもIV号が次の角を曲がっている後姿を見ることになった。

「……読まれてるな」

「さすがは私の妹だな」

「嬉しそうに言ってるんじゃないぞ」

本当に笑いごとじゃない。

今までも『動きを読まれている』という感覚は何度も持ったが、ここまで心の裏側まで見透かされているような感覚は初めてだった。

(もしかしたら今度こそ……)

頭の中に浮かんできた考えを打ち消す。

私たちは勝つのだ。

勝つて、まほを二十連覇の初代隊長にする。

できなければ、まほがまた世間からバッシングを食らうことになる。

それは絶対に避けなければならない。

また角を曲がる。

今度はIV号の車体が半分ほどしか隠れていなかった。

「レンー！」

砲塔を回し、引き金を引く。

惜しくも掠っただけに終わった。

「くそっ」

そう呟いた瞬間、IV号が再び姿を見せて砲撃してきた。

メイが再びそれをかわした。

「油断も隙もねえな」

「私の妹だからな」

「うるせえ」

「でも、もう広場に出ます。次からは隠れられる場所はありません」

「そこで決着になりそうですね」

ユリの言葉通りに広場に出た。

IV号と広場中央にある邪魔な柱越しに向かい合う。

さんざん粘ってくれたが、さすがのみほもこうなったら正面きって戦うしかないはずだ。

そして一騎打ちにおける、みほの必殺技も私たちは知っている。

ドリフト走行で敵戦車の後方に回り込んでからのゼロ距離砲撃。

必ずこれで来る。

まほが私の肩に手を置いた。

一つ息を吐いて、照準に目をつける。

IV号が動き出す。

予想通り、右手側に大きく回りこむ動きだ。

ここからドリフトして私たちの後方に回り込むつもりだ。

メイが進地旋回で車体を回していく。

同時に私も砲塔を回していく。

(コン)だー)

そう思った瞬間、IV号からの砲撃があった。

衝撃で照準がズレた。

「撃てー！」

引き金を引くが装甲に阻まれる。

IV号がドリフト走行を始める。

砲塔の旋回を再開する。

そして、ついに。

照準がIV号の姿を捕えた。

(……だー)

まほからの指示を待つ。

その一瞬の時間は間延びして、まるで一時間も経ったように感じられた。

しかし、いつまでも「撃て！」の言葉は来なかった。

代わりに、肩に置かれた手が『撃たないでくれ！』と言っていた。

(……ああ、そうか)

そのとき、なんというか、諦めがついた。

結局、まほは黒森峰の隊長とか、西住流戦車道の後継者とかいう以前に、妹思いのお姉ちゃんなのだ。

IV号が照準器の視界を横切っていった。

手が勝手に砲塔を回す。

IV号が私たちの側面を通ったのが音でわかる。

履帯が切れているのか、ガラガラガタガタと転輪が地面のコンクリートに当たっている音がするのだ。

照準が再び捕えたときには、IV号は装甲の薄い背面につけていた。

やつとまほが「撃て！」と言った。

でも、その手は相変わらず『撃つな』と言っている。

私の指は動かない。

(まったくシスコンめ……)

砲撃音がした。

数瞬の間があつてから、頭の上で間抜けな音がした。

大洗の勝ちで、私たちの負けだ。

「済まない、みんな」

まほが無線で謝った。

とりあえず一発くれてやった。

別に怒っているわけじゃないが、けじめとして一発必要だった。

「レ、レンさん!？」

アカネが驚いたような声をあげ、ユリも信じられない物を見るような目で見ていた。

「で、どうするんだ？　これから世間からはバッシングの嵐、西住流の中からだって文句

が来るだろ。黒森峰のOB会もそうだ」

「もちろん謝りに行く。行くが……」

「行くが、何だ？」

「ちよつと勇氣がいるな」

「ハッ」

思わず笑つてしまふ。

「じゃあ、一緒に謝りに行つてやるよ」

「……すまない、頼めるか？」

仕方がない奴だ。

Side クラスメイト9

スクリーンの中で、まほがゆっくりと目を閉じた。

「大洗女子の勝利！」

アナウンスが流れた。

会場は割れんばかりの歓声に包まれた。

多くは大洗の勝利を祝うものだ。

ただ、黒森峰の応援団がいる私の周りは、そういう雰囲気じゃなかった。

聞こえる声は乱暴に吐き捨てるような言葉しかなかった。

まほが戦車から降りて、観客席に近づいてくると声は一層高くなった。

誹謗中傷としか思えない言葉がたくさん投げかけられた。

まほは俯いて、それに耐えていた。

(こんなのおかしい)

そう思った。

その瞬間、体が動いた。

「まほー！ かつこよかったよー！」

まほが驚いたような顔で、こつちを見た。と、同時に観客席の視線も私に集まった。かまうもんか。

「まほー！ かつこよかったー！」

もう一度、言つてやった。

「まほー！ かつこよかったー！」

すると観客席の空気が少しずつ変わってきた。

「西住さん！ カレー作つて待つてるよー！」

最初に声をあげたのは前田さんだった。

続いて隣のファンクラブの子も立った。

「西住隊長！ カッコよかったですー！」

さらに続いて拍手がはじまった。

まほは目を丸くして観客席を見ていた。

その後ろからメイさんとユリさんが歩いてきて肩を叩いた。

少し遅れてレンさんもやってきて、同じことをして、何かを言った。

笑顔だった。

よく見ると、まほの左の頬が赤くはれている。
殴られたのだろう。

もう誹謗中傷は聞こえなくなっていた。

思うことがないわけではないだろうけど、今はそれだけでよかった。

「まほ！　かつこよかったよ！」

もう一度言うのと、まほの顔に苦めの笑いが浮かんだ。

『ありがとう』

と、口が動いた。

それからちよつと苦味のある笑みが浮かんだ。

その苦笑いすら、そこはかとなくカツコよかった。

「お姉ちゃん！」

そこへ、みほちゃんが駆け寄っていく。

まほの正面に立つと、彼女は少し気まずそうな表情をした。

そこには黒森峰の今後や、まほの今後のことへの心配の色が垣間見えた。

「優勝おめでとう」

そんな妹に、まほは言った。

「完敗だな」

敵しい表情を緩めて、手を差し出す。

みほちゃんも意図を察したらしい。

姉妹二人で握手をする。

「みほらしい戦いだっただな。西住流とはまるで違うが」

「……そうかな？」

「そうだよ」

みほちゃんが後ろで待っている仲間たちを振り返る。

それからまた、まほに向き直って仲間たちの方に帰っていった。

去り際に

「やっと思つけたよ。私の戦車道！」

という言葉を残して。

それを見送る、まほの表情はちよつと寂しそうだった。

けど、どこか嬉しそうでもあった。